

埼玉県本庄市

諏訪遺跡(B地点)・久城前遺跡(B地点)  
発掘調査報告書

—県営畑地帯総合土地改良事業上里南部地区に係る発掘調査報告書Ⅰ—

本庄市教育委員会

本庄市埋蔵文化財調査報告 第15集

埼玉県本庄市

<sup>すわ</sup>諏訪遺跡(B地点)・<sup>ぐじょうまえ</sup>久城前遺跡(B地点)  
発掘調査報告書

— 県営畑地帯総合土地改良事業上里南部地区に係る発掘調査報告書Ⅰ —

本庄市教育委員会

## 序

本書は、常日頃、いろいろと御指導いただいている埼玉県教育局指導部文化財保護課、本庄土地改良事務所の協力で実施された県営畑地帯総合土地改良事業に係る発掘調査報告書であります。

調査は幹線、支線排水路部分の幅4米余という限定された区域であり、さらに昭和50年代当初に埼玉県教育委員会によって上越新幹線、関越自動車道建設に伴い調査が行われた場所に隣接する部分でもあります。

近頃、藤ノ木古墳、長屋王の邸宅、吉野ケ里などの諸遺跡がマスコミに取り上げられぬ日は無いと言っても良いほどの脚光を浴びております。発掘調査の一挙一動までも、大々的に取り上げられる調査がある一方で、酷暑、極寒の中、各地で黙々と調査に取り組んでいる人々の多いことを忘れてはならないと思います。

埼玉県内でも昭和40年頃から発掘調査件数、面積ともに増加の一途をたどり、昭和62年には336件に上るとのことです。

今回の調査は、このような限定された状況のなかで、昨日よりは今日、今日よりは明日と、精一杯真剣に取り組んだ調査を実施してくれました。細やかながらもそれなりの成果として立派に通用するものと思います。

最後になりましたが、調査に、そして報告書刊行のための整理にと御尽力いただいた多くの方々に心から御礼申し上げます。

平成元年3月10日

本庄市教育委員会

教育長 坂 本 敬 信

# 例 言

- 1 本報告書は、本庄市教育委員会が調査主体となって昭和62年度に実施した県営畑地帯総合土地改良事業上里南部地区に係る発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和63年1月6日～3月30日にかけて行い、整理作業、報告書の作成は昭和63年5月17日から平成元年3月にかけて行った。
- 3 発掘調査は、長谷川の指導、指揮のもと佐藤が現地指揮を取った。
- 4 発掘調査は、調査区に沿って幅1mの試掘トレンチを設定し遺構の確認を行い、遺構の検出された部分を重機（0.4ユンボ）を導入して表土の排除を行い、遺構の存在しない部分を排土置場とした。
- 5 実測は中央航業株式会社に委託して取り付けた座標を基準に、セオドライト（測機舎 TM20D）を使用し、1mグリット（五寸釘使用）を設定して行った。標高は中央航業株式会社の設定したベンチマークからレベル（測機舎 B2）を使用し測定した。作図作業は主に長谷川・早野・佐藤が行い、作業員の補佐を得た。
- 6 遺物・発掘調査における写真は佐藤・井上が撮影した。
- 7 出土品の整理、実測、図版の作成や遺物の観察は長谷川の指導のもと佐藤の指示に従い以下の分担で本庄市埋蔵文化財センターにて行った。

遺物の水洗・註記・復原	佐藤・関根・久保田・津久井・我妻・日向・滝沢
遺物の実測	佐藤・関根・久保田・津久井・我妻・日向・滝沢
図版トレース	佐藤
- 8 本書の編集、執筆は佐藤が行い、長谷川が監修した。I-1は増田が執筆した。
- 9 本書に掲載した遺構実測図、写真、出土遺物は本庄市埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 文化庁長官に提出した「埋蔵文化財発掘通知」および文化庁受理番号は以下のとおりである。

遺跡名 諏訪・久城前遺跡、所在地 本庄市大字今井字久城前地、面積2000㎡、通知番号 本教社発第144号 昭62・6・8付、文化庁受理番号 62委保記第2-2990号 昭和62年9月28日
- 11 本書における実測図および観察表は以下の凡例による。
  - 1) 遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりである。また、平面図の北は座標北である。

方形周溝墓平面図	1：150	溝	1：80	土器	1：4
----------	-------	---	------	----	-----
  - 2) 遺構実測図中のスクリーントーンは、斜線が遺構の基盤であるローム層を、網目が攪乱を表現している。
  - 3) 土器実測図中断面のベタ塗りは須恵器を表す。
  - 4) 土器実測図中の矢印は調整の方向を表し、断面側のヒゲは土師器の場合にはヨコナデの範囲を、須恵器の場合はケズリの範囲を示す。
  - 5) 遺物観察は、1 法量、2 胎土、3 成形、4 整形、5 形態、6 焼成、7 色調、8 使用痕、9 出土状況、10 接合関係、11 備考の順に記述しそれぞれ頭文字で表した。個々の項目及び用語については『旭・小島古墳群発掘調査報告書Ⅰ』に準拠した。

6) 第1次調査出土遺物は報告書に掲載された図版を拡大したものを一部改変し再トレースしたものである。尚、第1次調査出土遺物については、観察表を付さなかった。

12 発掘調査、整理、報告書の作成にあたり、次の方々から御教示・御指導をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)

外尾常人	鈴木徳雄	丸山 修	岡本幸男	坂野和信	坂本和俊	恋河内昭彦
横川好富	増田逸朗	高橋一夫	篠崎 潔	金子彰男	平田重之	柴崎起三雄
井上 肇	大沢昌徳	栗原文蔵	早川智明	石橋桂一		

13 発掘調査、整理及び報告書作成の組織は下記のとおりである。

昭和62年度			昭和63年度		
主体者 本庄市教育委員会			主体者 本庄市教育委員会		
教育長	坂本 敬信		教育長	坂本 敬信	
社会教育課			社会教育課		
課 長	荒井 正夫		課 長	荒井 正夫	
課長補佐兼文			課長補佐兼文		
化財保護係長	小林 弘子		化財保護係長	田村 文一	
社会教育係	斉藤みゆき (庶務)		社会教育係	斉藤みゆき (庶務)	
文化財保護係	長谷川 勇		文化財保護係	長谷川 勇	
	増田 一裕			増田 一裕	
	早野 秀之			早野 秀之	
担当者	長谷川 勇		担当者	長谷川 勇	
	増田 一裕			増田 一裕	
担当者補助	佐藤 好司		担当者補助	佐藤 好司	
	井上富美子		作業員	関根 典子	
作業員	荒井幸太郎	福島 芳夫		久保田かつ子	
	笠本 源一	木村 三好		津久井八重子	
	笠本 作治	根岸 右作		我妻きよみ	
	八木 道良	井上 一郎		日向みどり	
	木村 喜平	武藤 洋子		滝沢美知子	
	堀田 依包	小林 洋子			
	町田 惣吉				

# 目 次

序

例 言

目 次

I	発掘調査の契機と経過	
1	調査に至る経過	1
2	調査の経過	2
3	調査の方法	3
II	遺跡をとりまく環境	
1	地理的環境	5
2	歴史的環境	5
III	諏訪遺跡（B地点）の調査	
1	第1次調査の概要	13
2	第2次調査の遺構と遺物	13
IV	久城前遺跡（B地点）の調査	
1	第1次調査の概要	43
2	第2次調査の遺構と遺物	43
V	ま と め	
1	方形周溝墓について	48
2	中世の遺構・遺物について	50
3	遺跡群呼称に関する提言―「集落群」の提唱―	54

写真図版

# 挿 図 目 次

第1図	周辺の集落址分布図	4
第2図	諏訪・久城前遺跡周辺地形図	9・10
第3図	諏訪・久城前遺跡全測図	11・12
第4図	諏訪遺跡1号周溝墓第1次調査出土遺物	14
第5図	諏訪遺跡1号周溝墓出土遺物	14
第6図	諏訪遺跡1・2号周溝墓	15

第7図	諏訪遺跡1号周溝墓土層図	16
第8図	諏訪遺跡2号周溝墓土層図(1)	17
第9図	諏訪遺跡2号周溝墓土層図(2)	18
第10図	諏訪遺跡2号周溝墓出土遺物	19
第11図	諏訪遺跡3・4号周溝墓	20
第12図	諏訪遺跡3号周溝墓土層図	20
第13図	諏訪遺跡3号周溝墓第1次調査出土遺物(1)	21
第14図	諏訪遺跡3号周溝墓第1次調査出土遺物(2)	22
第15図	諏訪遺跡3号周溝墓出土遺物	22
第16図	諏訪遺跡4号周溝墓第1次調査出土遺物	22
第17図	諏訪遺跡4号周溝墓出土遺物(1)	23
第18図	諏訪遺跡4号周溝墓出土遺物(2)	24
第19図	諏訪遺跡4号周溝墓土層図	24
第20図	諏訪遺跡3号溝	25・26
第21図	諏訪遺跡3号溝・5号溝第1次調査出土遺物	27
第22図	諏訪遺跡3号溝出土遺物	28
第23図	諏訪遺跡8～15号溝出土遺物	29・30
第24図	諏訪遺跡5号溝	31
第25図	諏訪遺跡16号溝	32
第26図	諏訪遺跡16号溝出土遺物	33
第27図	諏訪遺跡17号溝	34
第28図	諏訪遺跡17号溝出土遺物	35
第29図	諏訪遺跡1号竪穴状遺構出土遺物	35
第30図	諏訪遺跡1号竪穴状遺構	36
第31図	諏訪遺跡1号土坑出土遺物	36
第32図	久城前遺跡6・9・10号溝	44
第33図	久城前遺跡6号溝第1次調査出土遺物(1)	45
第34図	久城前遺跡6号溝第1次調査出土遺物(2)	46
第35図	久城前遺跡6号溝・9号溝出土遺物	46
第36図	方形周溝墓主軸分布	48
第37図	諏訪3号周溝墓平面企画復元図	49
第38図	内耳土器分類表	51

# 写真図版

- 写真図版 1 諏訪 2 号周溝墓 諏訪 3 号周溝墓  
写真図版 2 諏訪 3 号周溝墓土器出土状況 諏訪 4 号周溝墓  
写真図版 3 諏訪 17 号溝 諏訪 1 号竪穴状遺構  
写真図版 4 諏訪 1 号土坑 久城前 6・9・10 号溝  
写真図版 5 出土遺物  
写真図版 6 出土遺物



# I 発掘調査の契機と経過

## 1 調査に至る経過

本庄市は従来農業と養蚕に遺存する農業体系から成り立ってきた。近年では工業団地や住宅地の開発が盛んになり、市内の様相は著しく変貌しつつある。しかし、市街地の周辺に目を転じるとハウス栽培等の農業生産も進展しており、これに関連する土地改良事業が昭和40年代より実施されている。

市内の西部で大字今井地区の畑地に、県営畑地帯総合土地改良事業が着手され、これに伴う事前の埋蔵文化財保護のための協議書が、本庄土地改良事務所より本庄市教育委員会へ提出されたのは昭和60年11月28日であった。これに対して、市教育委員会では昭和60年12月18日付本教社発第343号で、埋蔵文化財の所在についての回答文書を送付した。すなわち、同事業実施予定地内には本庄53-096、099、100、101、126、170号遺跡が所在しており、現状保存が望ましいこと、文化財保護法の趣旨に則った保存措置を講じることを要求した。その後、埼玉県教育局指導部文化財保護課、埼玉県耕地課、本庄土地改良事務所、本庄市土地改良課と事前の協議を数度行った結果、約43haの事業予定地はカット等著しい掘削を実施せず、地下の包蔵物を破壊しない条件で面的な工事が昭和61年度より進行することとなった。本事業予定地内で発掘調査が必要となった箇所は、掘削を行う小排水路の部分のみが対象となり、調査範囲が限定され極力発掘を行わず、地下の包蔵地を現状保存する条件で、工事が進行した。小排水路の部分は当初工事が実施されず、発掘調査完了後に計画された。したがって、本事業予定地内においては面的な発掘調査を行っていない。

発掘調査は昭和62年度より実施する運びとなったが、その経緯は本庄土地改良事務所より昭和62年6月6日付本地第457号で本庄市教育委員会を經由して、埼玉県教育委員会に当該地域の埋蔵文化財に対する取扱いの依頼が送付され、同県教育委員会からは本庄市教育委員会教育長宛てでこれに対処する通知が届いた。これにより事前に発掘調査の必要とする地域は諏訪遺跡及び、久城前遺跡で、発掘総面積は約2,000㎡を対象とし、文化庁側と農政側の予算配分調査実施時期等をまとめた。農政側の予算措置については委託者である埼玉県と本庄市において委託契約書が昭和62年7月20日に締結された。埋蔵文化財発掘調査通知は昭和62年6月6日付本地第457号で本庄土地改良事務所長より、昭和62年6月8日付本教社発第144号で埼玉県教育委員会を經由して文化庁長官宛て提出した。これに対し昭和62年7月2日付教文第2-79号で埼玉県教育委員会より本庄市教育委員会を經由して本庄土地改良事務所長宛て周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知文書が送付され、当該土木工事实施前に事前の発掘調査を行うよう指導がなされた。また、昭和62年9月28日付62委保記第2-2990号で文化庁より埼玉県教育委員会に発掘に関する受理書が届いたことを、昭和62年10月14日付教文第3-92号で埼玉県教育委員会より本庄市教育委員会教育長宛てに通知された。以上の経過を経て県営畑総上里南部地区本庄市側の埋蔵文化財発掘調査が実施されることとなった。 (増田)

## 2 調査の経過

### 1月

1月6日より調査を開始する。調査区域内はブッシュがひどく下草刈りに苦慮するが、下草刈りに並行して調査区域全域に遺構確認のために幅1mのテストトレンチを設定し人力で掘下げる。新幹線に平行する幹線排水路第4号の部分は全体に土取りによる攪乱が存在しており、攪乱の断面に遺構が確認された箇所もあり遺構の遺存状況が憂慮された。しかしながら、周溝墓状の遺構および溝が10条前後確認され、新幹線調査部の延長部分となることが予想された。

支線排水路第2号の部分は関越自動車道寄り和新幹線寄りの部分に溝、竪穴住居址状の落ち込みが確認されたのみで、中央部分は遺構基盤層のハードルームも不安定で、遺構は全く存在しなかった。関越自動車道寄りに確認された溝は同自動車道建設時の調査の延長部であり、久城前遺跡とし、それ以外を諏訪遺跡と呼称することにした。

### 2月

前半は1月より引き続きテストトレンチの開掘を進め遺構の確認にあたる。

2月16日よりテストトレンチの結果を参考にユンボを導入して表土剥ぎをおこなう。表土剥ぎは遺構の存在する箇所を中心に行い、遺構の存在しない部分を排土置場として確保した。

表土剥ぎの完了した部分から順次開掘を開始する。周溝墓は2号周溝墓において周溝内を1mのグリットに分割して覆土全てをフルイにかけ、全ての土層図を作成した。3号周溝墓からは完形の小型器台が出土し、1・2・4号周溝墓からも土器片が出土する。いずれも五領期でも新しい様相を示すものである。

### 3月

土層図・遺構平面図の作成を始める。開掘は3号溝に主力を注ぐが、溝が深いことや下層に堆積した砂利層の掘下げに苦慮する。遺物は主に砂利層から出土しており、摩滅の著しい物が多く流下したものと考えられる。

3号溝に続き16・17号溝の開掘にあたるが、出土した土器からいずれも中世の所産になるものと考えられた。特に17号溝からは「元祐通寶」と管玉状の石製品が出土した。

16日から久城前遺跡の溝の開掘にあたるが、溝幅が広いことや日期的な面からテストトレンチの断ち割り結果を参考にユンボを導入して掘下げる。諏訪遺跡3号溝同様下層に砂利層の堆積が認められ、砂利層内から土器片が出土した。この時点でこの溝と諏訪遺跡3号溝が連続する溝である可能性が考えられた。

後半は主に平面実測作業を中心におこない、遺物取り上げ、写真撮影など効率的に作業を進めていき、赤城おろしの寒風が身にしみるなか進められた現地作業も3月30日には全て終了した。

### 3 調査の方法

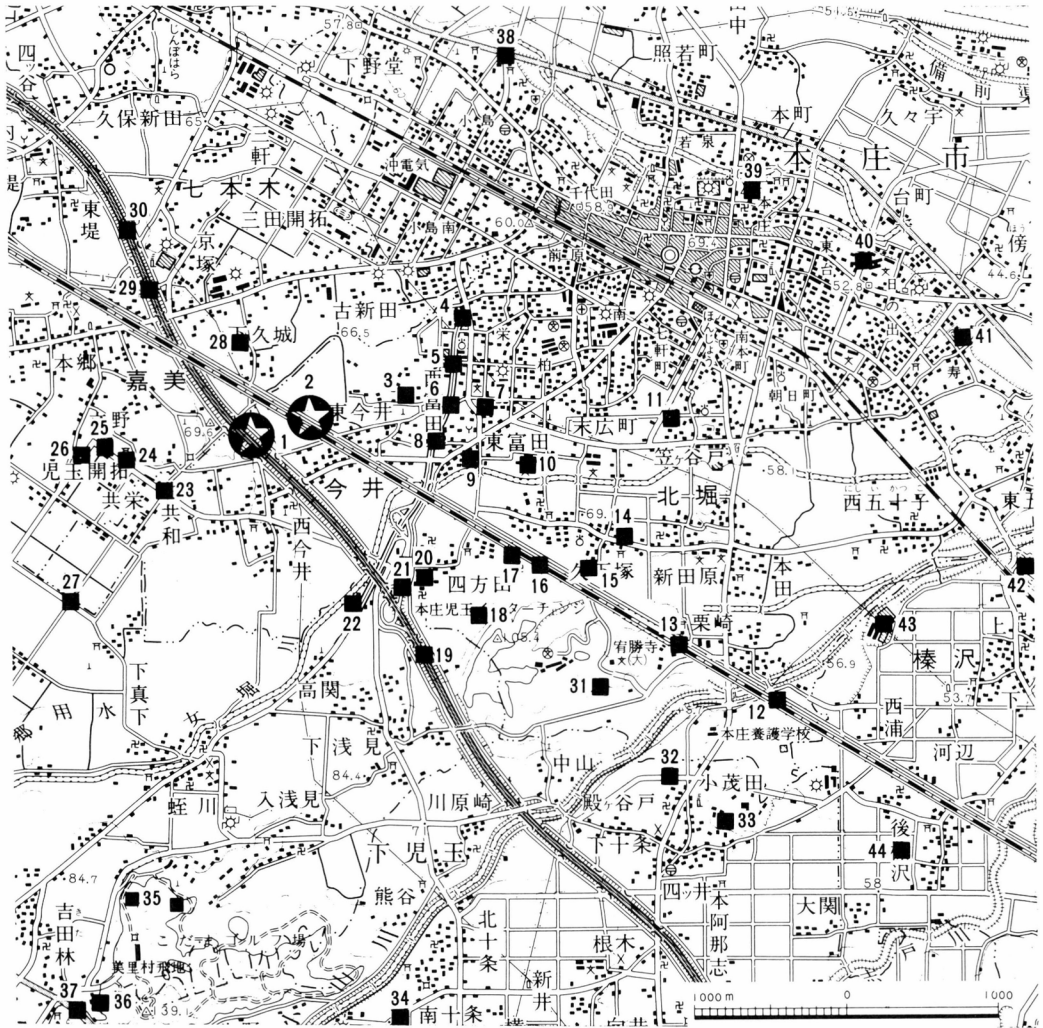
諏訪・久城前遺跡は既に前項で触れた通り、前者が1974年に上越新幹線、後者が1975年に関越高速自動車道建設に伴い埼玉県教育委員会によって調査されており、既に報告書も刊行されている。今回の調査地はその隣接地であり調査前より遺跡の状況は比較的良く把握することができた（以後、埼玉県教育委員会による調査を第1次調査、今回の調査を第2次調査と呼称する）。それによれば、五領期の方形周溝墓、五領～鬼高期の集落、真間期の溝・河川址、中世の溝・墳墓が存在していた。特に方形周溝墓・溝・河川址に関しては、第1次調査の延長部の調査を行うことが確実であり、第1次調査の結果を基に調査方針を組み立てた。

方形周溝墓に関しては、周溝内からの玉類、鉄製品等の出土例が比較的多く知られており、周溝内に土壌状の落ち込みが認められる例も少なくなく、溝中埋葬の可能性が指摘されるものも存在する。1983～85年の埼玉県立博物館による神川町前組遺跡の調査は筆者も参加する機会を得たが、周溝内の覆土を全てフルイにかけた結果覆土に含まれた遺物の検出を行うことができた。それらの遺物が即溝中埋葬に結びつくかは検討を要するが、周溝内の開掘に当たって移植ゴテ等によって丁寧に行ってもなおリスクの存在することを証明する結果となった。そこで、その経験を基に方形周溝墓の周溝内の覆土を全てフルイをかけることとし、また、溝中埋葬の可能性も考慮し周溝内を1mのグリットによって開掘し全ての土層セクション図を作成することとした。しかし、これらの作業は多くの労力と時間を必要とするものであり、緊急発掘という性格上、時間的・予算的な制約から検出されるであろう3～4基の方形周溝墓全てで行うことは不可能であり、1基をモデルケースとし調査を行うことにし、結果的に2号周溝墓において行った。それ以外の方形周溝墓については上記の観点に基づき細心の注意を払い開掘に当たり必要と思われる箇所についてはフルイがけを行った。

遺構番号は従来、先次調査に継続する形で付与することを慣例としていたが、第1次調査の遺構番号が遺構の種別にかかわらず通し番号となっており、今後の調査に当たり混乱が予想されたため第2次調査で検出された遺構については新たに番号を付与することにした。ただし溝についてはその性格を考慮し旧番号のままとし、新たに検出した溝については第1次調査に続けて付与した。第1次調査と第2次調査の番号の対照は下記の通りである。尚、第2次調査を便宜上B地点と呼称する。

第1次調査	第2次調査
諏訪51号周溝墓 未検出	諏訪1号周溝墓
諏訪9号周溝墓	諏訪2号周溝墓
諏訪29号周溝墓	諏訪3号周溝墓
諏訪溝3	諏訪4号周溝墓
諏訪溝5	諏訪3号溝
	諏訪5号溝

第1次調査	第2次調査
諏訪溝7	諏訪10号溝
無番号	諏訪16号溝
無番号	諏訪17号溝
久城前溝6	久城前6号溝
久城前溝7	久城前9号溝
未検出	久城前10号溝



第1図 周辺の集落址分布図

1. 久城前遺跡
2. 諏訪遺跡
3. 西富田新田遺跡
4. 二本松遺跡
5. 夏目遺跡
6. 社具路遺跡(北部)
7. 南大通り線内遺跡
8. 社具路遺跡(南部)
9. 本郷遺跡
10. 雌濠遺跡
11. 笠谷谷戸遺跡
12. 古川端遺跡
13. 東谷遺跡
14. 久下東遺跡
15. 七色塚遺跡
16. 下田遺跡
17. 観音塚遺跡
18. 山根遺跡
19. 雷電下遺跡
20. 四方田遺跡
21. 後張遺跡
22. 川越田遺跡
23. 今井遺跡群B～G地点
24. 熊野太神南遺跡
25. 八幡太神南遺跡
26. 立野南遺跡
27. 将監塚・古井戸遺跡
28. 下廓遺跡
29. 本郷東遺跡
30. 愛宕遺跡
31. 大久保山遺跡
32. 村後遺跡
33. 小茂田遺跡
34. 樋之口遺跡
35. 生野山遺跡
36. 阿知越遺跡
37. 御林下遺跡
38. 小島本伝遺跡
39. 本庄城跡遺跡
40. 薬師堂遺跡
41. 諏訪新田遺跡
42. 六反田遺跡
43. 大寄B遺跡
44. 地神祇A遺跡

## II 遺跡をとりまく環境

### 1 地理的環境

諏訪・久城前遺跡は本庄市の南西部、本庄市今井字諏訪・久城前に位置する。本庄市をはじめとする児玉郡をのせる本庄台地は、神流川・志戸川両扇状地からなる複合扇状地性の台地で多くの中小河川によって開析されている。神流川扇状地と志戸川扇状地は生野山丘陵と浅見山丘陵とを境に接しているが、諏訪・久城前遺跡は神流川扇状地のほぼ扇中央部に位置する。標高は68m前後で、ほぼ東に向かって緩やかに傾斜しており、調査によって検出された溝もほとんどがこの傾斜に沿って東流している。この部分の地形は一見平坦のように見受けられるが、地形図を観察すると埋没したいくつかの谷地形を認めることができる。調査した諏訪遺跡内においても3号溝南側、7号溝北側に谷地形が存在しており、3号溝南側の谷によって諏訪遺跡の集落は南北に分離される。本庄市西富田、上里町中久城・下久城周辺は久上水と呼ばれる野水の湧水点として知られており、9月の大雨の後には度々の水害を引き起こしているが、これらの谷地形も久上水と密接な関連をもつものであろう。諏訪遺跡はこれら開析谷の谷頭部に形成された遺跡と考えられる。

### 2 歴史的環境

ここでは、諏訪遺跡・久城前遺跡の存在する女堀川中流域の古墳時代～律令期の集落の動態を中心に概観していくこととする。ここで指す女堀川中流域とは極めてマクロな意味での地域設定であって、厳密には更に地域細分すべきものも含んでいることを最初に断っておく。

この付近の古墳時代集落は、富田遺跡群・西富田遺跡群・東富田遺跡群・今井遺跡群などと呼称され複数の遺跡をいくつかのブロックに分類して呼称されている。特に西富田遺跡群は竈発生論をめぐって学史的にも著名な名称であり、固有名詞として定着した観がある。筆者の遺跡群名称に関する考え方は考察中において詳述しており、ここでは重複を避けるが、遺跡群に代わる用語として集落群を使用することとする。またここでは同一遺跡が複数の名称にわたっていることによる繁雑さを避けるため、単一の集落遺跡を指す用語として集落址の用語を用いる。例えば、社具路遺跡北部集落、南大通り線内遺跡、薬師遺跡の3遺跡は本来同一集落と考えられ、これらを総称して社具路北部集落址と呼称する。従って、集落址の用語を用いた場合には特定の集落の単位を、遺跡の名称はその遺跡の特定のもの指す場合に限り使用する。

古墳時代に先立ち、弥生時代後期の集落について触れておく。周辺地域で弥生時代後期の遺跡は少ないが、宥勝寺北裏遺跡<sup>1)</sup>・大久保山A遺跡<sup>2)</sup>・薬師堂遺跡<sup>3)</sup>・山根遺跡<sup>4)</sup>・村後遺跡<sup>5)</sup>で土器が採取されており、大久保山III B遺跡<sup>6)</sup>・大久保山IV A遺跡<sup>6)</sup>・飯玉東遺跡<sup>7)</sup>・塚本山古墳群内<sup>8)</sup>・生野山古墳群内<sup>9)</sup>では住居址が確認されている。これらの遺跡は沖積地に面した丘陵上や台地上に立地しており、数軒からなる小規模なものである。出土する土器も吉ヶ谷系・樽系・二軒屋系などが認められ、宥勝寺北裏遺跡のように三者が共存する場合もあり、複雑な状況を呈している。弥生時代後期集落分布と五領期の集落分布とは必ずしも重ならないケースが多く、集落形成に大きな変革もたらされたものと考えられる。

次に古墳時代の集落動向であるが、女堀川中流域の五領期の集落は、社具路北部集落<sup>10)</sup>、社具路南部集落<sup>11)</sup>、諏訪集落<sup>12)</sup>、後張・四方田集落<sup>13)</sup>、下田集落<sup>14)</sup>、雷電下集落<sup>15)</sup>などで確認されている。ほとんどが女堀川の沖積地の自然堤防上に立地しており、諏訪集落はやや例外的である。前項でも触れた通り、埋没谷の谷頭部に形成された集落址と思われる。女堀川中流域は所謂女堀条里が存在するが、後張・四方田集落址は女堀条里中の微高地上に存在しており、女堀条里が古くからの可耕地とし機能していたものと考えられるが、一丁田遺跡<sup>16)</sup>、後張遺跡等においてその開墾を五領期に求められる溝が検出されており、女堀川中流域への集落の進出が五領Ⅲ期の段階に新たな耕地の開拓の結果に生まれたものであることを示唆している。このことは、五領期の集落分布が必ずしも弥生時代後期の集落分布と重ならないことからもうかがうことができよう。

和泉期には五領Ⅲ期に進出した集落に加え新たな集落の形成が見られ、特にその傾向は和泉Ⅱ期段階に顕著で、五領期に展開する集落の規模を遙かに凌駕している。和泉Ⅱ期に新たな進出が見られる集落は、夏目集落<sup>17)</sup>、二本松集落<sup>18)</sup>、西富田新田集落<sup>19)</sup>、雌濠集落<sup>20)</sup>、山根集落址などで、その集落増加現象はまさに爆発的ともいえる様相を呈している。和泉期の集落形成にあたっては和泉期のみの単独集落が形成されるケース（西富田新田集落址、二本松集落址、雌濠集落址など）と、鬼高期にも集落が継続されて拠点集落として発展していくケース（社具路北部集落址、夏目集落址・後張・四方田集落址、山根集落址、下田集落址など）がある。

和泉Ⅱ期の土器群の成立にあたって布留式・韓式・須恵器の3つの土器の影響を受けて成立したものであることは、すでに指摘されていることであるが、富田集落群中の二本松・夏目・社具路北部（南大通り線内遺跡）・雌濠の各集落址からは布留式土器を忠実に模倣した甕型土器が出土している。現在のところ富田遺跡群中の各集落からの出土が目立っているが、今後周辺地域での類例は増えるものと思われる。また、後張集落址（後張B遺跡）からは伽耶系軟質土器の平底鉢が出土しており、諏訪集落址からは初期須恵器あるいは伽耶系軟質陶器を模倣したと考えられる蓋が出土している。

これらの傾向は5世紀中葉の首長墓である本庄市公卿塚古墳<sup>22)</sup>・児玉町生野山將軍塚古墳<sup>23)</sup>・金鑽神社古墳<sup>24)</sup>にも認めることができ、これら古墳に樹立されていた通常のナデ・ハケ調整による埴輪に混じって韓式土器の影響と考えられる格子目タタキの埴輪が採用されていた。在地で作られる可能性の極めて高い土師器や埴輪に非在地的要素が見られることは、首長らによって非在地系集団との交流が積極的に行われた結果とみることができ、そのような積極的交流のなかで、様々な非在地的要素が流入してくるものと思われる。他地域よりいち早く住居内に竈の出現をみることや、ミカド遺跡で推定された初期須恵器の在在の存在などもそれらの所産によるものといえよう。これらを背景に人口の増加が起り集落の増加現象として反映されたものと思われる。

鬼高期は和泉Ⅱ期において爆発的に増加した集落が継続される形で存在する。既に触れたように和泉期において終束する集落もあるが、女堀川中流域においては鬼高期に新たに形成される集落は僅かであり、和泉期より継続する集落内で住居が増加する傾向にある。このことは、水田・畑地などの生産基盤の安定化が図られたことによるものと考えられる。

鬼高期は神流川河岸段丘流域の開発が始まる時期であるが、神流川流域における五領・和泉期の集落は主に上流の丘陵部に僅かに存在するのみであり、次代の鬼高期の集落の展開の状況から考えて、

それら丘陵上の集落群のみによる開発行為の結果とは考えにくい。したがって、他の地域からの移住が推定されるが、女堀川中流域の集落群からの移住も考えられよう。

鬼高期には主に自然堤防上に集落が展開していくが、真間・国分期に入るとそれら自然堤防上の集落は減少の傾向にあり、水田地帯を臨む洪積地への進出がみられる。鬼高期から継続する集落は社具路北部集落址(和名抄の草田郷に相当)、夏目集落址、山根集落址などであり、鬼高期の集落の中で拠点集落(群)が真間・国分期まで継続して集落を展開させていくようであり、拠点集落(群)が生産・流通の経済的基盤を確保していたことによると考えられる。これら鬼高期よりの拠点集落とは別に洪積地に新たに大規模な集落の展開がみられるのもこの時期であり、将監塚・古井戸集落址<sup>25)</sup>、立野南・八幡太神集落址、今井集落址、皂樹原・檜下集落址<sup>26)</sup>などが存在する。特に将監塚・古井戸集落址、皂樹原・檜下集落址は竪穴式住居社群中にコ字配列の掘立柱建物群や四面庇付きの掘立柱建物の存在など一般集落とはやや異なった建物がみられる。前者は律令期の児玉郡、後者は賀美郡に位置づけられるが、この2つの集落址をそれぞれの郡衙に比定するには躊躇せざるをえないが、出土する遺物の特殊性や、鍛冶工房の存在から推定して官営施設(寺院・郡衙など)ないしは、その関連施設にきわめて深く結びついた郷であると推定される。ただし、本庄市今井、上里町七本木にかけて存在する久城<sup>27)</sup>の地名が郡城あるいは郡上の変化したものであるとすれば、郡衙推定地にも見られる地名であり、この付近に賀美郡衙が存在する可能性のあることを指摘しておく。

洪積地とは別に丘陵裾部にも集落が展開するようになり、大久保山集落群<sup>28)</sup>、阿知越集落址<sup>29)</sup>などがこれにあたる。阿知越集落址は水田地帯を臨まない立地にあり、集落が必ずしも水稲耕作に寄生するとは限らないようである。

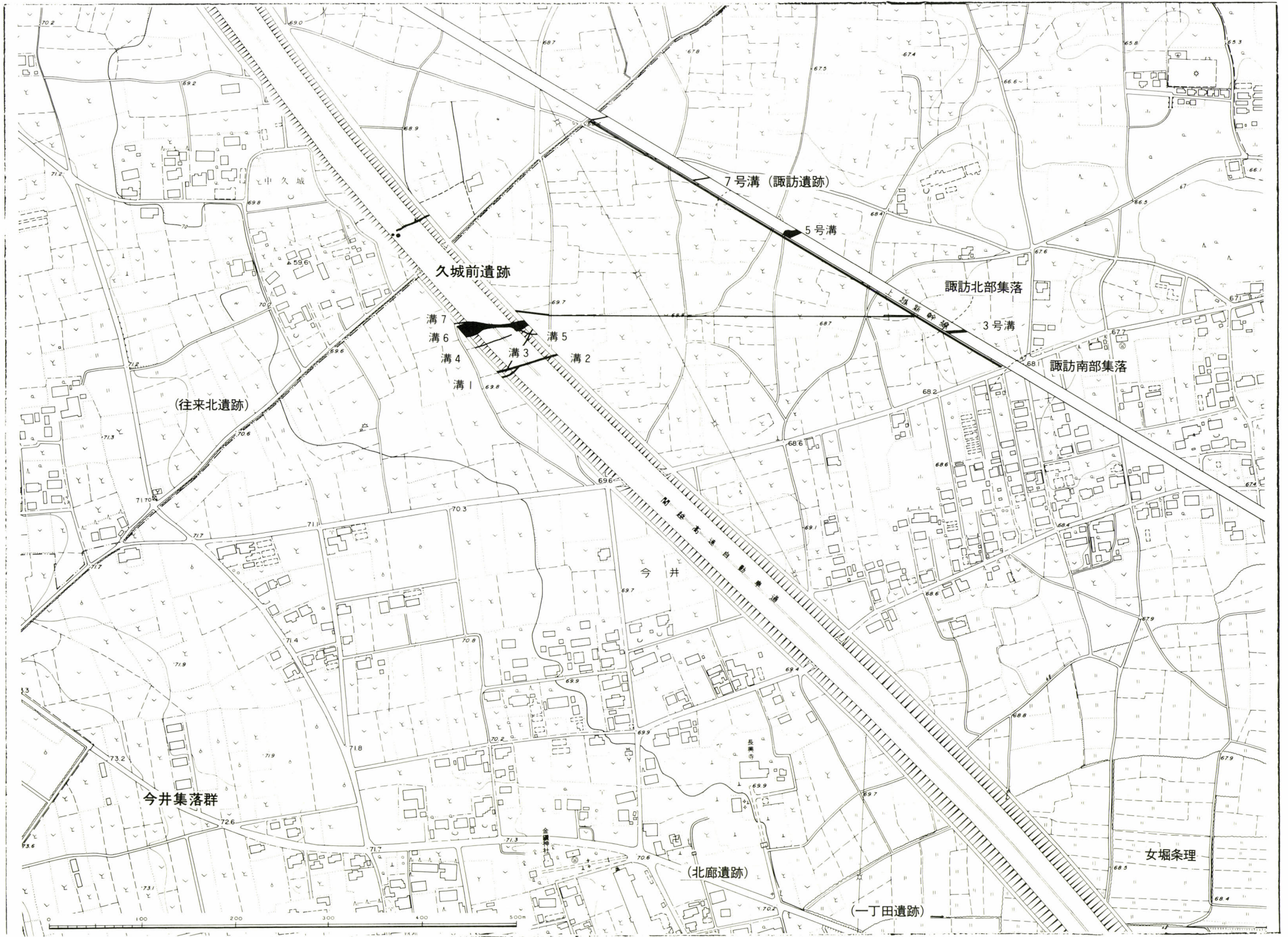
洪積地における集落展開の背景には新しい律令体制による支配機構の編成を示唆するものであり、和泉期後半に編成された集落が再編成され、新体制のもとで計画的な集落編成が行われた結果と推定される。女堀川中流域には施行年代は不明ながら所謂女堀条里が存在しており、恐らくは古墳時代以来の水田地帯を中心に集落の再編成と相前後し条里制が施行されたものと推定され、用排水路もそれらに伴い掘削されたものと思われる。女堀条里には神流川から取水する九郷用水が東流するが、この九郷用水の原形もこの時期に掘削されたものと考えられる。しかし、これらの一連の事業も国単位による直接の事業ではなく、少なくとも郡単位あるいは複数の郡レベルで計画、実施されたものと推定される。

註)

- 1 本庄市 『本庄市史』資料編 1976
- 2 前掲註1
- 3 前掲註1
- 4 昭和62年度に本庄市教育委員会によって調査した。現在整理作業中。
- 5 細田勝・富田和夫・利根川章彦 「向田・権現塚・村後」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 6 本庄市 『本庄市史』通史編I 1986
- 7 増田逸朗他 「雷電下・飯玉東」『埼玉県遺跡発掘調査報告書第9集』 埼玉県教育委員会 1979

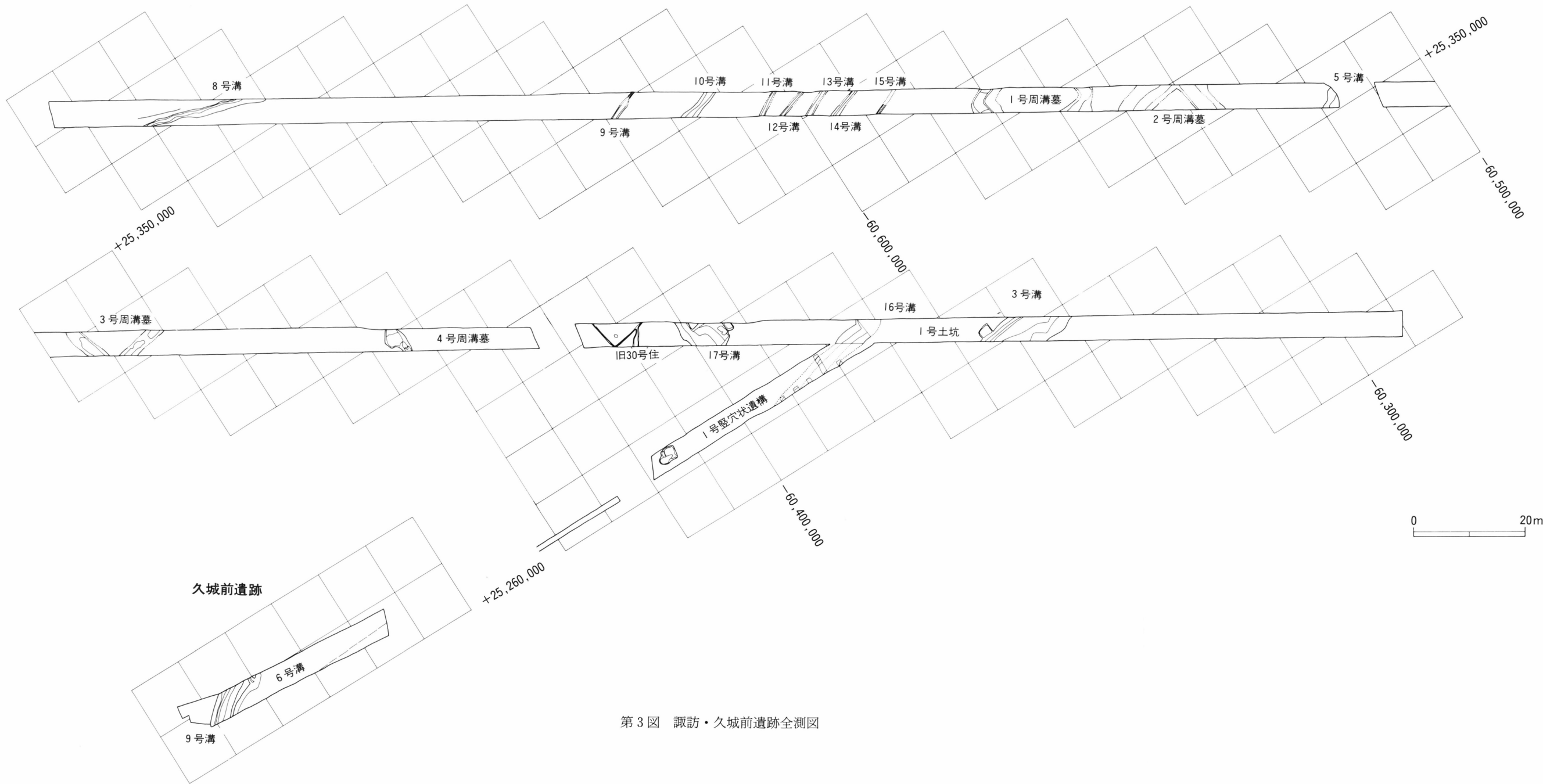
- 8 増田逸朗 「塚本山古墳群」『埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集』 埼玉県教育委員会 1977
- 9 菅谷浩之・駒宮史朗 「児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 1973
- 10 長谷川勇他 「社具路遺跡発掘調査報告書」『本庄市埋蔵文化財調査報告第5集 3分冊』 本庄市教育委員会 1987、増田一裕 「南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅰ」『本庄市埋蔵文化財調査報告第9集 第1分冊』 本庄市教育委員会 1987、前掲註1
- 11 長谷川勇他 「社具路遺跡発掘調査報告書」『本庄市埋蔵文化財調査報告第5集 3分冊』 本庄市教育委員会 1987、前掲註1
- 12 増田逸朗・柿沼幹夫 「下田・諏訪」『埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集』 埼玉県教育委員会 1979
- 13 昭和61年度に本庄市教育委員会によって調査した。 増田逸朗他 「後張Ⅰ・Ⅱ」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10号・2・6集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982・1983
- 14 増田一裕 「東富田遺跡群発掘調査報告書」『本庄市埋蔵文化財調査報告第10集』 本庄市教育委員会 1987、前掲註13
- 15 前掲註7
- 16 富田和夫・赤熊浩一・市川純子「立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 17 長谷川勇他 「夏目遺跡発掘調査報告書」『本庄市埋蔵文化財調査報告第5集 2分冊』 本庄市教育委員会 1985、前掲註1
- 18 長谷川勇他 「二本松遺跡発掘調査報告書」『本庄市埋蔵文化財調査報告第5集 1分冊』 本庄市教育委員会 1983、前掲註1
- 19 前掲註1
- 20 前掲註6
- 21 坂野和信 「和泉式後期土器の様相」『本庄市立歴史民俗資料館 紀要』第2号 1988
- 22 佐藤好司 「公卿塚古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室 1986
- 23 乾芳宏・亀谷泰隆「埼玉県生野山將軍塚採取の埴輪片」『考古学ジャーナル』97号 1974
- 24 佐藤好司 「金鑽神社古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室 1986
- 25 富田和夫・赤熊浩一「将監塚・古井戸 古墳歴史時代編Ⅰ」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 26 篠崎潔・金子彰男 『臼樹原・檜下遺跡発掘調査概報』 臼樹原・檜下遺跡調査会 1986
- 27 久上、久条と書く場合もある。
- 28 藤川繁彦他 『早稲田大学本庄校地埋蔵文化財発掘調査概報1』 1984
- 29 鈴木徳雄他 「阿知越遺跡Ⅰ・Ⅱ」『児玉町文化財調査報告書第3・4集』 児玉町教育委員会 1983・1984





第2図 諏訪・久城前遺跡周辺地形図





第3図 諏訪・久城前遺跡全測図



## III 諏訪遺跡（B地点）の調査

### 1 第1次調査の概要

既に記した通り第1次調査は上越新幹線建設に先立ち発掘調査されたが、新幹線高架部の調査であることから幅20m弱のトレンチを遺跡に設定したような状況であり、遺跡全体の様相を把握するにはいたっていない。自然地形はマクロに見れば調査区に対しほぼ45°の角度をもって緩やかに傾斜しており、検出された溝もほとんどが自然地形にそって東流している。ミクロ的に見ればいくつかの谷地形を認めることができ、現在も微低地としてその名残をとどめている。

検出された遺構は住居址9軒（五領期1、和泉期4、鬼高期3、不明1）、方形周溝墓5基（五領期）、溝7条（真間期、中世）、土壇（五領期、中世）である。

周溝墓群（諏訪墳墓群）は3号溝と7号溝に挟まれた部分に存在しており、幅110m程の範囲で地形にそって細長く分布するものと考えられる。周溝墓により若干の軸の違いはあるが、地形にそってほぼ東西方向に軸をもち、規模は28号周溝墓が5メートルと小型の他は10m～12m前後である。周溝内から出土する土器は、いずれも五領期のなかでも新しい様相を示すものであり、五領III期の範疇に編年されるものである。

住居址は方形周溝墓群の存在する地区（諏訪北部集落）に4軒、3号溝の南東側の微低地ををはさんだ地区（諏訪南部集落）に5軒と2地区に存在する。北部集落は五領期1軒（25号住）と和泉II期3軒（30号住、31号住、32号住）の集落であり、25号住は周溝墓群造営以前のものであり、和泉II期にはこの場所は造墓エリアとして意識されていなかったものと考えられる。南部集落は和泉II期1軒（49号住）と鬼高I期古段階3軒（45号住、46号住、48号住、47住?）の集落であり、鬼高I期古段階に中心をもつ。特に49号住からはTK23型式並行の須恵器無蓋高坏が出土している。

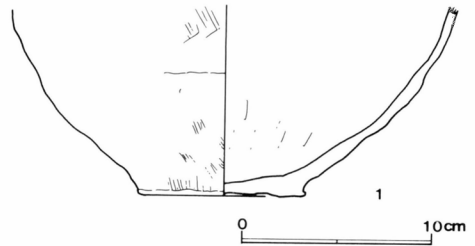
### 2 第2次調査の遺構と遺物

#### 1) 方形周溝墓

幹線排水路第4号部分の調査区より4基の方形周溝墓を確認することができた。1・3・4号周溝墓は第1次調査で調査されたものの延長であったが、2号周溝墓は新たに確認されたものである。これにより諏訪墳墓群では現在周溝墓6基が確認されている。周溝墓群は諏訪南部集落と微低地を挟んで存在する諏訪北部集落の位置に立地するが、15号溝以西では溝以外の遺構は検出されておらず1号周溝墓が諏訪墳墓群の西限となるものと思われる。周溝墓群の存在する箇所は土地改良時の土取りによって調査区の中央部が幅約2mにわたって攪乱をうけており、場所によっては遺構が消失している箇所もあって、攪乱の間をぬっての調査となり、十分な調査を行うことができなかったのは遺憾である。

## 1号周溝墓（第4・5・6・7図、写真図版5）

1号周溝墓（旧51号方形周溝墓）は調査区の北西寄りに位置し、諏訪墳墓群の北端に存在する。南側で2号周溝墓と接している。1次調査では北東側コーナー及び北側・東側の周溝を検出したが、今回の調査では北西・南東側のコーナーと西側・南側の周溝の一部を検出し、規模を明確にすることができた。南北軸はN-15°-W、方台部長は南北10.8m、東西11.85mでほ

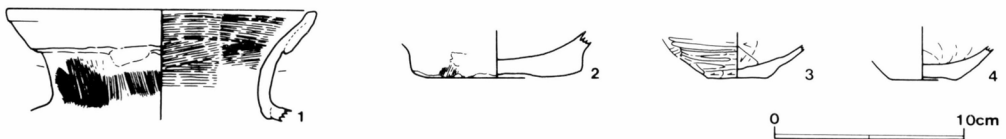


第4図 諏訪遺跡1号周溝墓第1次調査出土遺物

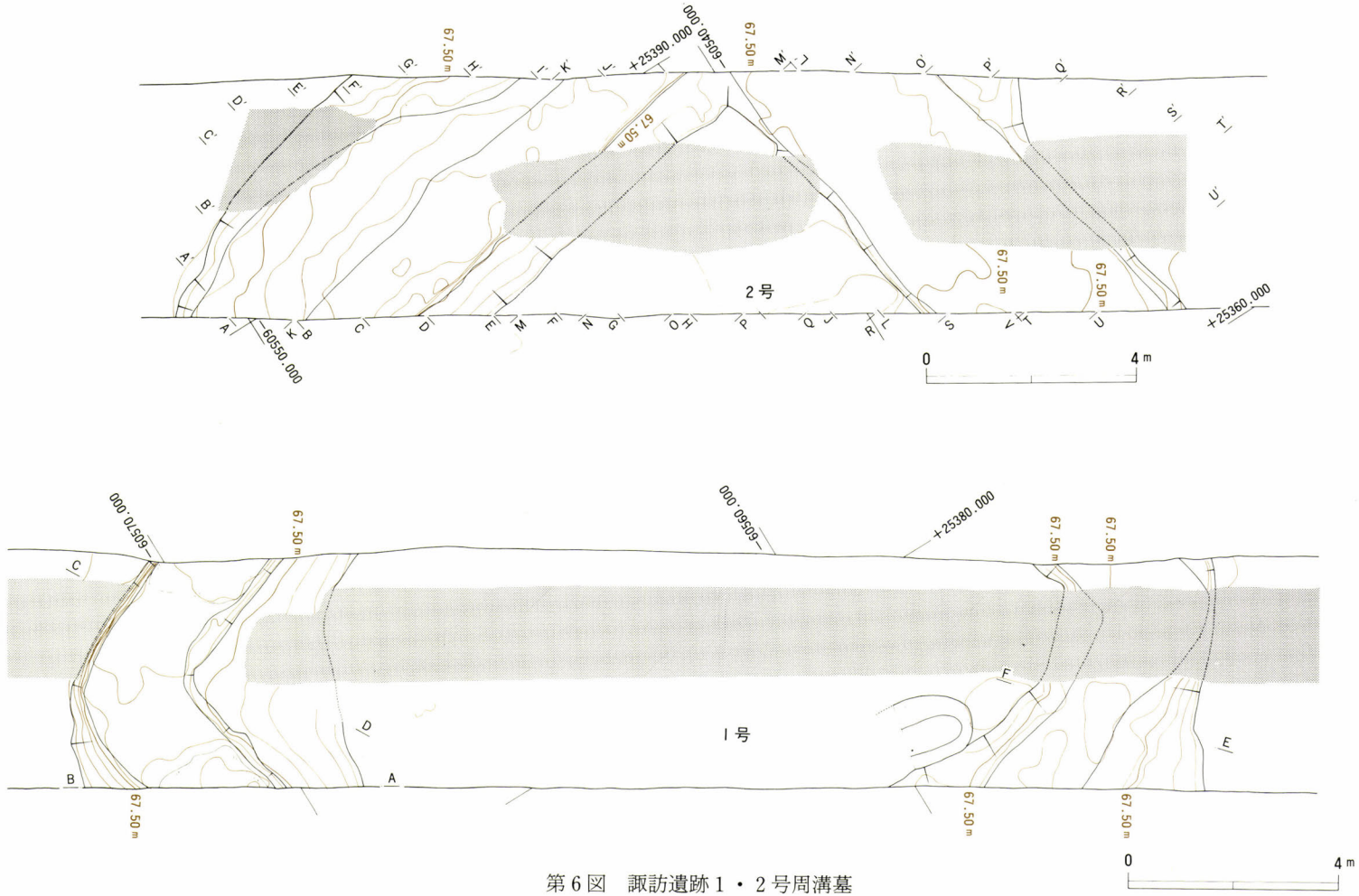
ぼ東西に長い長方形になるものと考えられる。調査区のほぼ中央部に土取りによる攪乱があり、南東側コーナーはこれによって完全に破壊されていた。方台部は遺構確認面直上まで浅間A軽石を含む表土（耕作土）によって覆われており、墳丘や埋葬施設の存在を確認することは出来なかった。しかし、周溝内端部には、ロームブロックを多量に含んだ層が堆積している墳丘の存在を示唆しており、恐らく、埋葬施設も墳丘内に設けられたため確認できなかったものと思われる。

周溝は北側・西側周溝では比較的掘り込みも深く、確認面より溝底までの深さが0.74m前後を測り断面形状も逆台形を呈している。北西コーナー部の溝底はほとんどフラットであり北側・西側の周溝にむかうにつれ徐々に深くなっていく。北西コーナー部周辺の周溝内端部は途中で緩やかに変換し立ち上がるが、この部分の土層を観察するとロームを多く含んだ層が堆積しており、本来このような緩斜面を形成していたのではなく、周溝肩部が崩壊したものと考えられる。したがってこの部分の立ち上がりは確認された状態よりしっかりしたものであったと推定される。南側周溝は確認面より溝底までの深さが0.6mを測り、北側・西側周溝より若干浅い。周溝外端の立ち上がりも緩やかで、そのラインも内端部に比し外側に張り出すようにのびている。恐らくは第1次調査で確認された東側周溝の外端部のラインに対応し中央部が外側に張り出す形状を呈するものと推定される。

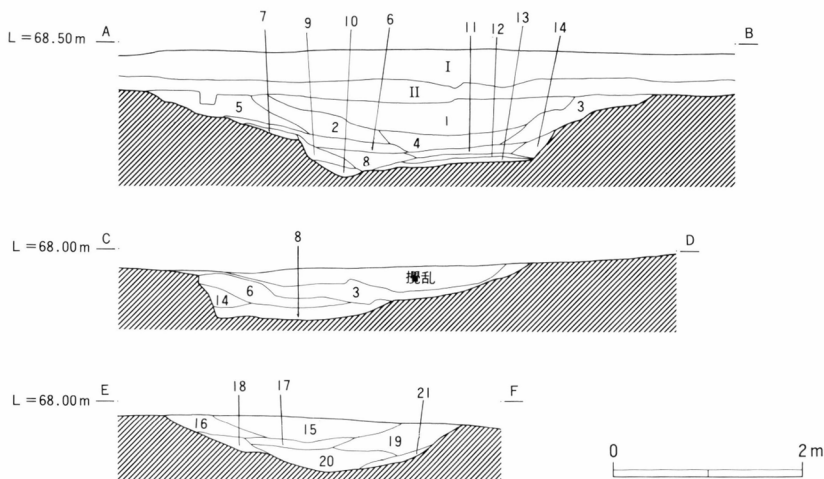
遺物は北側周溝から若干の土器片と、南側周溝から多くの土器片が出土している。南側周溝から出土した土器は方台部より流入したものと、周溝外側より流入したものとがある。図示できたのは壺形土器の口縁部・底部、埴形土器である。



第5図 諏訪遺跡1号周溝墓出土遺物



第6図 諏訪遺跡1・2号周溝墓



第7図 諏訪遺跡1号周溝墓土層図

- 1号周溝墓土層
- |          |  |          |  |
|----------|--|----------|--|
| I. 灰褐色土  | 浅間A軽石を多量に含みサラサラする。固くしまる。(表土)                 | 10. 黄褐色土 | ロームブロックを多量に量む。粘性あり。                      |
| II. 黒褐色土 | 浅間A軽石を多量に含む。1層の黒色土を含み黒味がかかる。(表土)             | 11. 暗褐色土 | ローム粒子・白色パミス粒子を霜降り状に含む。4層より白色パミス粒子少なくやや明。 |
| 1. 黒色土   | ローム粒子・ロームブロックを微量含む。サラサラとして砂質あり。              | 12. 暗褐色土 | ローム粒子を霜降り状に含む。白色粒子を全く含まない。色調は11層に似る。     |
| 2. 暗褐色土  | ローム粒子霜降り状に含む。黒色ブロック斑状に入る。5層より暗。              | 13. 黄褐色土 | ハードローム層                                  |
| 3. 暗褐色土  | 小型ロームブロックを含む。黒色土ブロック含む。                      | 14. 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロックを多く含む。周溝崩部崩壊土。              |
| 4. 暗褐色土  | ローム粒子、白色パミス粒子を霜降り状に含む。1層の照りを受け黒味がかかる。11層より暗。 | 15. 灰褐色土 | ローム粒子・ロームブロックを全く含まない。砂質あり。16層より暗。        |
| 5. 暗黄褐色土 | ローム粒子を多量に含む。2・6層より明。                         | 16. 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。15層より明。17層より暗。       |
| 6. 暗褐色土  | ローム粒子・微小のロームブロックを霜降り状に含む。6・7層より暗。            | 17. 暗褐色土 | 16層よりローム粒子・ロームブロックの含有量多い。                |
| 7. 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含む。風化ロームか?                        | 18. 黄褐色土 | 大型のロームブロックを多量に含む。斑点状に黒色土を含む。             |
| 8. 黄褐色土  | ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。黒色ブロックを斑状に含む。墳丘崩壊土か?     | 19. 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロックを全く含まない。15層より明。17層より暗。      |
| 9. 暗褐色土  | ローム粒子・微小ロームブロックを含む。6層よりやや明。                  | 20. 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロックを微量含み、僅かに黄味がかかる。19層よりやや明。   |
|          |  | 21. 黄褐色土 | 大型のロームブロックを多量に含む。周溝崩部崩壊土?                |

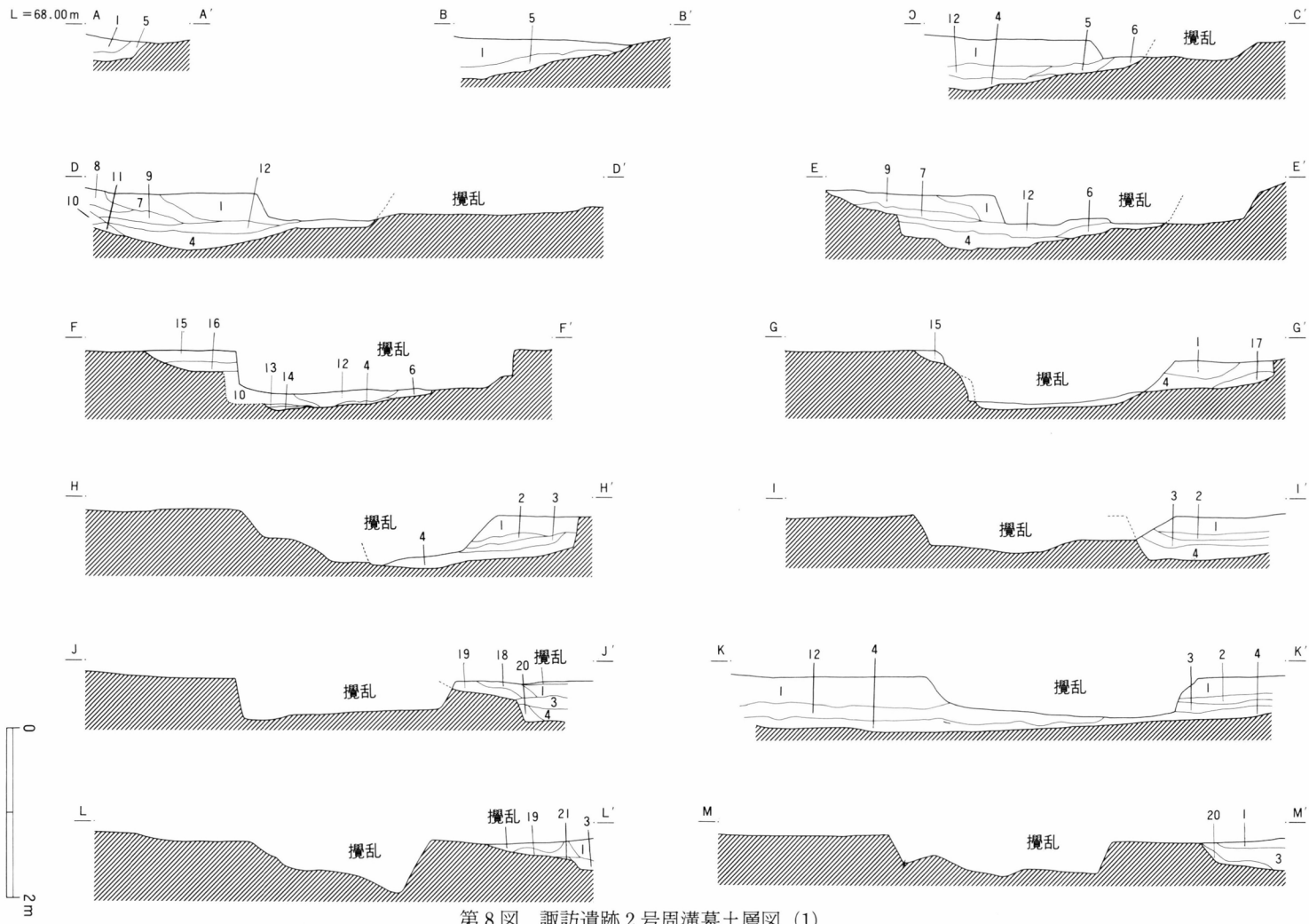
## 2号周溝墓 (第6・8・9・10図、写真図版1)

2号周溝墓は今回の調査で新たに検出された方形周溝墓であり、北側で1号周溝墓と接している。検出したのは北東側のコーナー部と北側・東側の周溝の一部であり、他は調査区外である。したがって、規模は不明であるが北側周溝の外端部のラインが西側で曲がり始めており、この部分からコーナー部に向って緩やかに変換していくと推定されるので、周溝外辺長12mの方形周溝墓になるものと思われる。軸はN-12°-Wでありほぼ1号周溝墓と同様の軸をもつ。周溝幅は東側周溝で3.8m、北側周溝の幅が広がる部分で5.2mを測る。周溝の内端の形状はほぼ直線的でありしっかりとしているが、外端の形状は北側周溝では中央部がやや膨らむような形態を呈している。また、東側周溝では北東側コーナー部に近い部分で膨らむ形状を呈している。

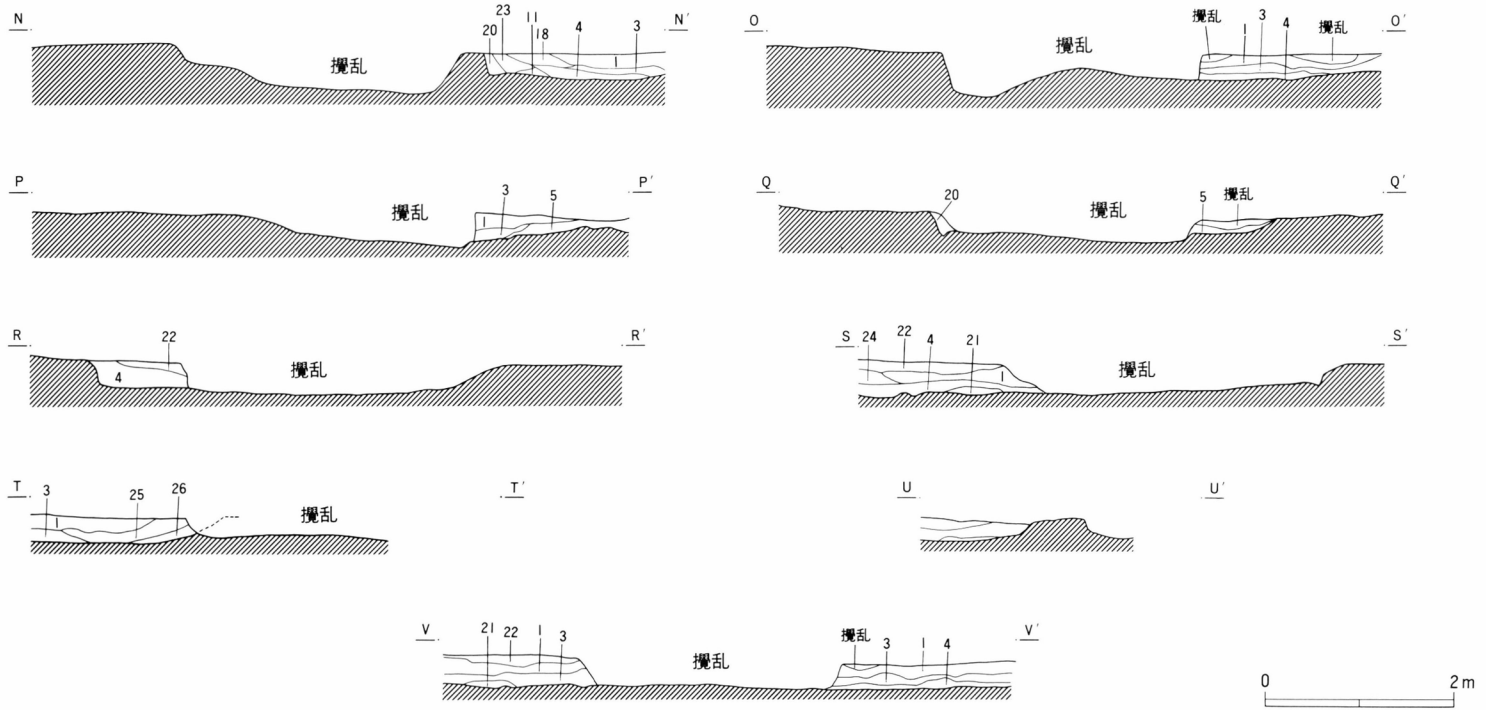
この周溝墓はI-3の項でも触れたとおり、周溝を1mのグリットに分割して開掘し各々土層図を作成し、周溝覆土は全てフルイにより選別した。結果的には溝中埋葬や玉類等の遺物の検出を得ることはできなかった。

調査区のほぼ中央に土取りによる攪乱が存在していたが、周溝が比較的浅かったこともあり一部では周溝の底面にまで達していた箇所もあった。方台部は確認面直上まで浅間A軽石を含んだ表土層が堆積しており、墳丘を確認することはできなかった。しかし、土層を観察すると、周溝の内側にはロー





第8図 諏訪遺跡2号周溝墓土層図(1)



2号周溝墓土層

1. 黒色土 ローム粒子・ロームブロックをほとんど含まず、サラサラと砂質あり。
2. 灰褐色土 黒味あるが3層の照りを受けて灰色がかかる。1層より明。
3. 明褐色土 風化粘土状の細かい砂質土。白色バミス粒含む。2層より明。
4. 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロックを霜降り状に含む。白色バミス粒含む。
5. 暗褐色土 ローム粒子を均一に含む、微小ロームブロックを若干含む。4層より明。3層より明。
6. 暗褐色土 ローム粒子を霜降り状に含む。白色バミス粒を若干含む。5層よりやや明。
7. 灰褐色土 ローム粒子を霜降り状に含む。黒味あるが灰色がかかる。サラサラと砂質あり。1層より明。
8. 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを霜降り状に含む。9層より明。
9. 暗褐色土 ローム粒子を霜降り状に含む。上層の照りを受けてやや黒味がかかる。12層よりやや暗。
10. 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。
11. 暗褐色土 ローム粒子・微小ロームブロックを霜降り状に含む。10層より暗。4層より明。
12. 暗褐色土 ローム粒子を霜降り状に含む。9層よりやや明。
13. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。10層より明。
14. 暗褐色土 ローム粒子を霜降り状に含む。13層より暗。
15. 暗褐色土 浅間A軽石を多量に含むサラサラする。
16. 暗褐色土 中型のロームブロックを若干含む。浅間A軽石を多く含むサラサラする。
17. 暗褐色土 ローム粒子・中型のロームブロックを霜降り状に含む。4層より明。
18. 灰褐色土 1層の照りを受け黒味がかかり、砂質あり。ローム粒子・ロームブロック含まず。1層より明。
19. 暗褐色土 ローム粒子・小型のロームブロックを含む。18層より明。
20. 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。周溝肩部崩壊土か？
21. 黄褐色土 風化ローム。
22. 表土 ローム粒子を霜降り状に含む。ふかふかとしてしまらない。
23. 暗褐色土 ローム粒子を微量含む、白色バミス粒若干含む。11層より暗。1層より明。
24. 暗褐色土 ローム粒子を霜降り状に含む。4層より暗。1層より明。
25. 暗褐色土 ローム粒子・微小ロームブロックを霜降り状に含む。3層より暗。
26. 暗黄褐色土 ローム粒子・微小ロームブロックを多く含む。白色バミス粒含む。3層より明。

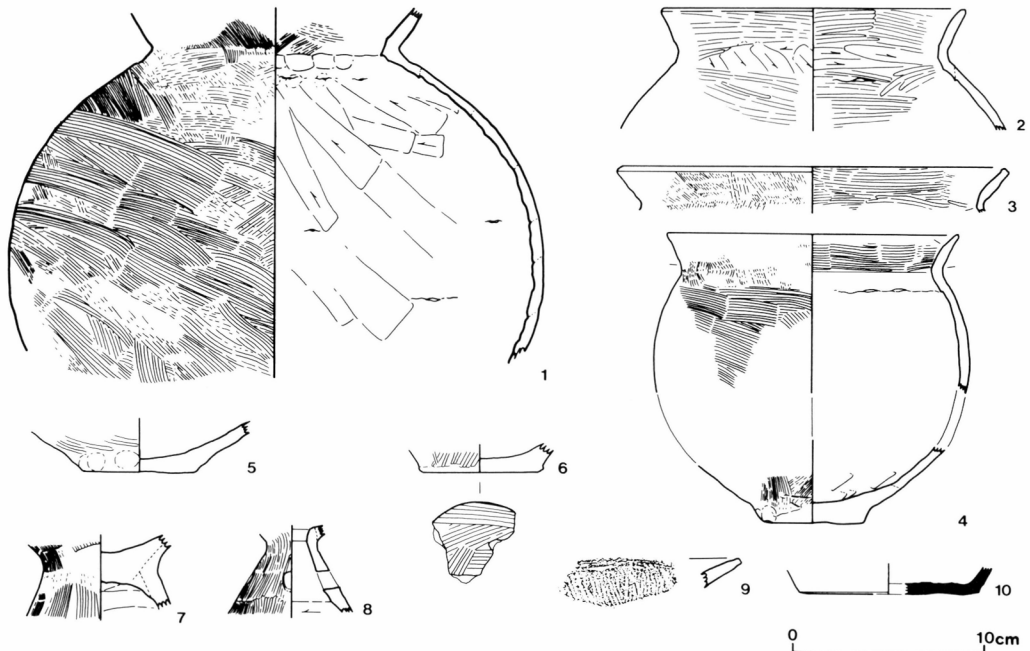
第9図 諏訪遺跡2号周溝墓土層図(2)

ムブロックを多く含んだ層が堆積しており、墳丘の存在を示唆するものと思われる。埋葬施設は精査したにもかかわらず確認できず、恐らく消失した墳丘中に存在したものと思われる。

周溝は全体的に掘り込みは浅かったが、特に東側周溝は浅く確認面より溝底まで0.25mを測り、北側周溝は確認面より溝底まで0.6mを測る。断面形状は内側の立ち上がりが急で外側の立ち上がりが緩やかであり、方台部側に深くなる傾向がある。

遺物は周溝のほぼ全域から180点程の土器片が出土したが、特に北側周溝に集中して検出された。土器片は1層中に多く含まれており、ほとんどが溝底より浮いて検出された。完形で検出されたものはなく、破片もまとまりのない状態で検出され、方台部より流入した状態のものが大多数であったが、周溝外側より流入したと考えられるものも少なからず存在した。

図示できたのは壺形土器4点、甕形土器2点、台付甕形土器1点、小型器台1点、須恵器坏1点である。なお、須恵器坏は混入である。



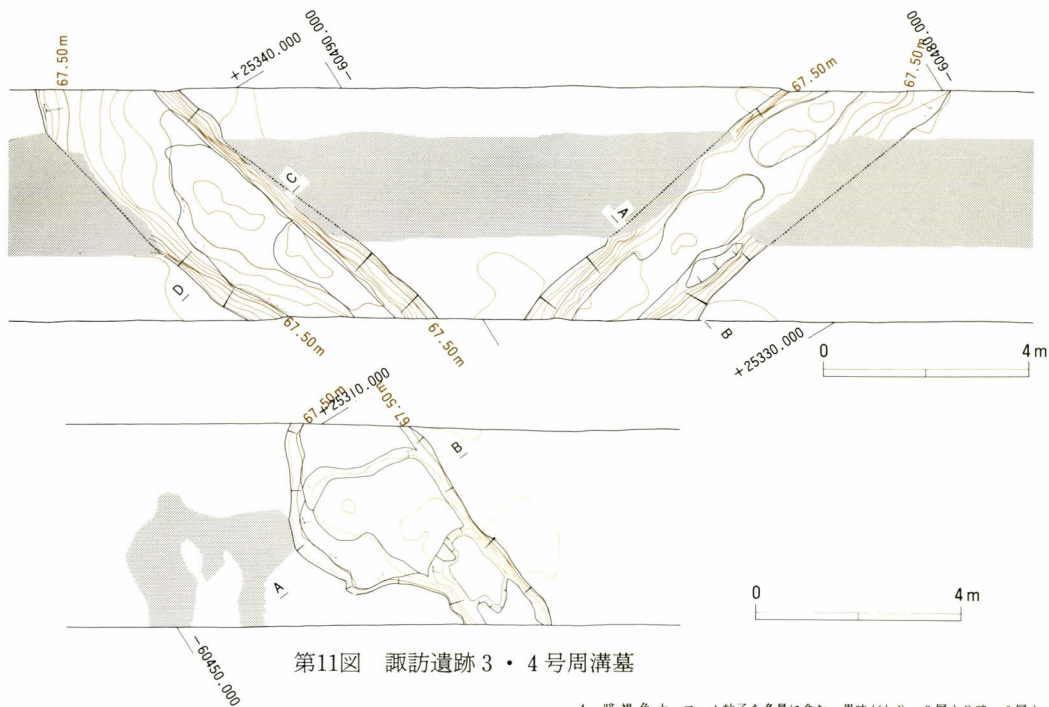
第10図 諏訪遺跡2号周溝墓出土遺物

### 3号周溝墓 (第11・12・13・14・15図、写真図版1・2・5)

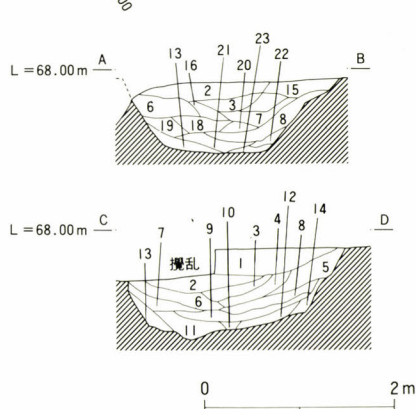
3号周溝墓 (旧19号周溝墓) は5号溝の東側に位置する。方台部南西側コーナーは僅かに調査区外となってしまうが、西側・南側の周溝を検出することができ、1次調査の成果と併せほぼ全容が判明した。方台部は南北9.75m、東西10.65mのやや長方形で、軸はN-11°-Wであり、1・2号周溝墓とほぼ同様の軸をもつ。調査区中央には土取りによる攪乱が存在しており、周溝の一部が破壊されていた。方台部は遺構確認直上まで浅間A軽石を含んだ表土層が堆積しており、墳丘は遺存していなかった。しかし、周溝の土層を観察すると、方台部側よりロームブロックを大量に含んだ層が流入しており、墳丘の存在を示唆している。

周溝は今回調査された4基の周溝墓のなかでは最も掘り込みが深くしっかりしたものであり、断面逆台形を呈する。周溝は南西側コーナー付近では内外の立ち上がりはほぼ同様の傾斜をもち、しっかりとした立ち上がりをもつが、コーナーから離れるにつれ外側の立ち上がりは緩やかになり、周溝の最も深い部分が方台部よりに存在する。周溝の深さ南西側コーナー寄りの最も深い部分で確認面から約1mを測る。

遺物は西側・南側周溝のコーナー寄りから完形の小型器台形土器がそれぞれ1点ずつ出土し、南側周溝の中央より埴形土器が1点出土している。覆土中から破片の状況での出土は殆どなかった。



第11図 諏訪遺跡3・4号周溝墓

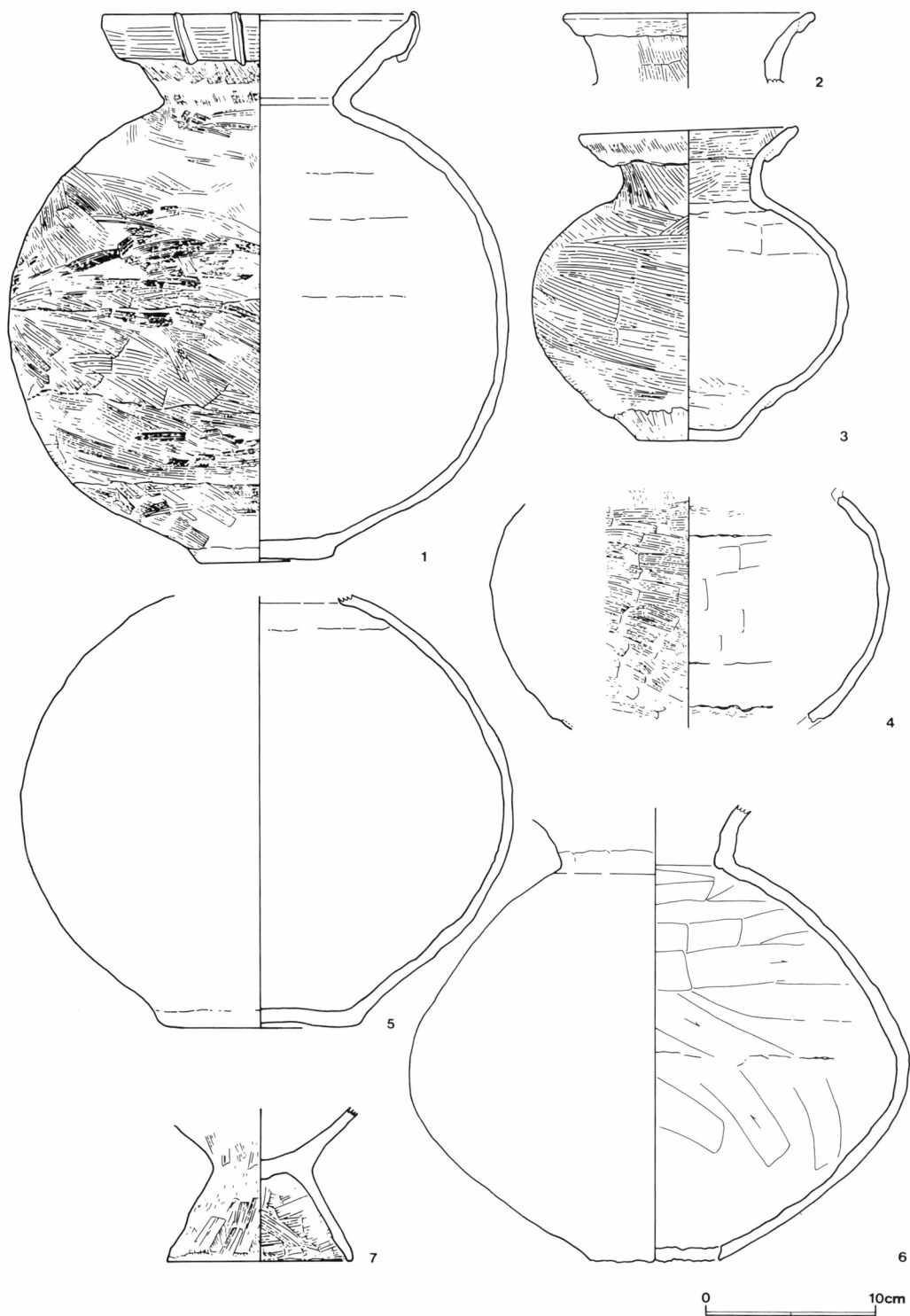


第12図 諏訪遺跡3号周溝墓土層図

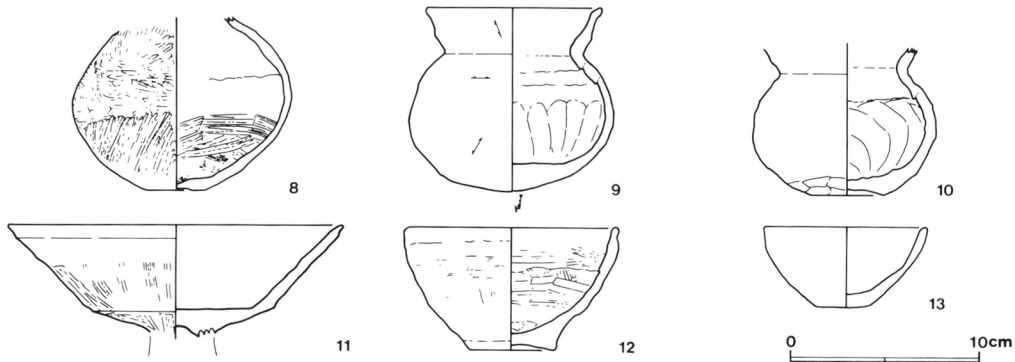
3号周溝墓土層

1. 黒色土 ローム粒子を霜降り状に含む。やや黄味がかかる。サラつき砂質あり。
2. 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。3層より明。小砂粒微量含む。
3. 暗黄褐色土 ローム粒子・小型のロームブロックを多量に含む。やや黒味がかり2層より暗。

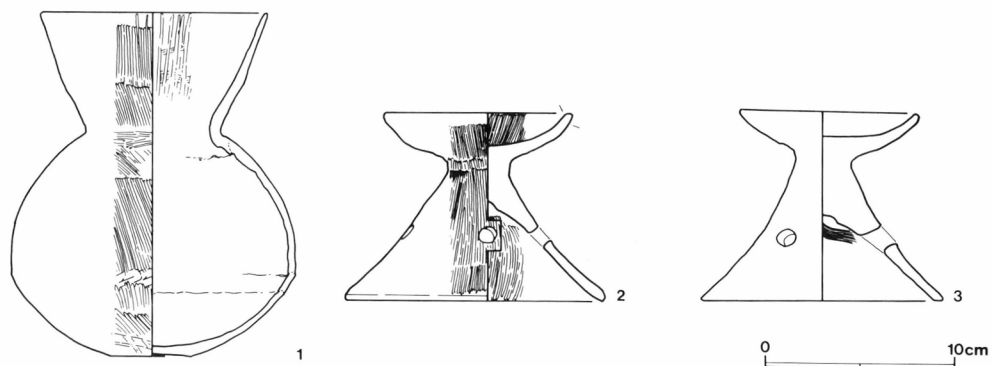
4. 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。黒味がかり、3層より暗。6層より明。
5. 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に、微小のロームブロックを霜降り状に含む。4層より明。8層より暗。
6. 暗褐色土 ローム粒子を多量に、小型のロームブロックを霜降り状に含む。黒色土混じり。4層より暗。
7. 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。2層より暗。
8. 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。5層より明。
9. 暗褐色土 ローム粒子・小型のロームブロックを霜降り状に含む。黒味がかり7・8層より暗。
10. 暗褐色土 ローム粒子・小型ロームブロックを霜降り状に含む。9層より黒味弱く明。11・12層より暗。
11. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多く含む。7層より明。墳丘崩壊土？
12. 黄褐色土 ローム粒子・小型のロームブロックを含む。10層より明。
13. 暗褐色土 ローム粒子・微小のロームブロックを含む。黒味がかる。
14. 黄褐色土 ハードローム層
15. 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。黒味がかる。2層より暗。17層より明。
16. 暗褐色土 ローム粒子・小型のロームブロックを霜降り状に含む。3・6層より暗。
17. 暗褐色土 16層と色調似るが小型のロームブロックを含まない。
18. 暗黄褐色土 ローム粒子・小型のロームブロックを多量に含む。やや黒味がかる。6層よりブロック粗い。
19. 黄褐色土 ローム粒子・小型・大型のロームブロックを多量に含む。18層よりブロック大きく明。
20. 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。ロームブロックを微量含む。17層より暗。
21. 暗褐色土 ローム粒子・微小・小型のロームブロック多量に含む。19層より暗。墳丘崩壊土か？
22. 黄褐色土 ロームブロックを均一に多く含む。
23. 暗褐色土 ローム粒子・小型のロームブロックを含む。黒味がかる。21層より暗。



第13図 諏訪遺跡3号周溝墓第1次調査出土遺物(1)



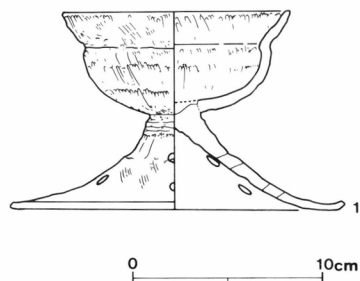
第14図 諏訪遺跡 3号周溝墓第1次調査出土遺物 (2)



第15図 諏訪遺跡 3号周溝墓出土遺物

#### 4号周溝墓 (第11・16・17・18・19図、写真図版2・5)

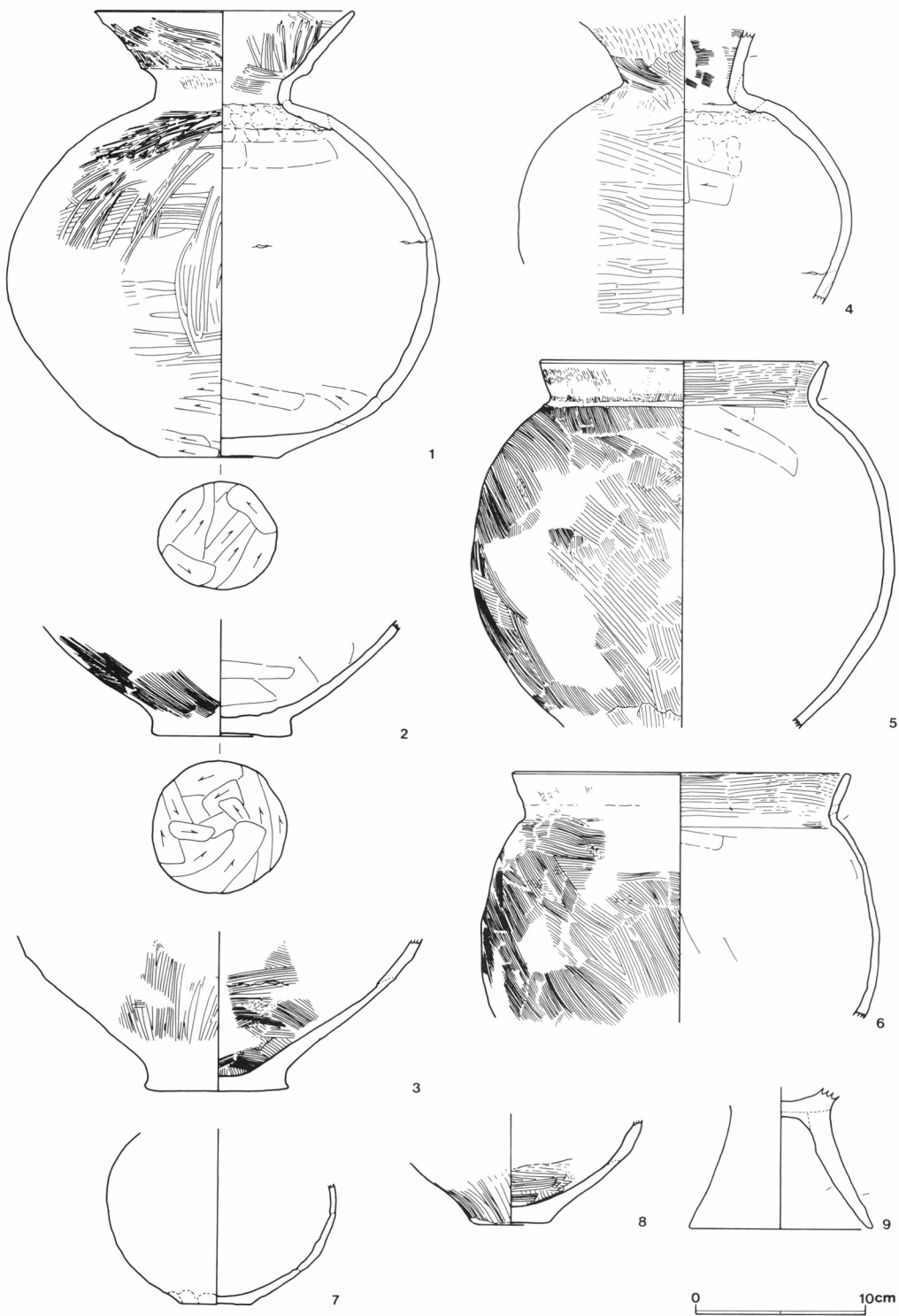
4号周溝墓 (旧29号周溝墓) は旧30号住居址の西側に位置する。第1次調査の所見を参考にすると、今回の調査では、南東コーナー部及び西側周溝の一部が検出されることが予想されたが、南東コーナー部が存在すると予想される部分は攪乱や後代の溝等の遺構が存在するのみで周溝を確認することはできず、消失してしまったものと思われる。結局検出できたのは西側周溝の一部であった。第1次調査を参考にして規模を復原してみると、方台部長が東西で10.65mで、各辺周溝外端の中央部が大きく膨らんで、コーナー部が最も周溝幅が狭くなる形状をとる。軸はN-0°-Eで1~3号周溝墓とはやや異なる。



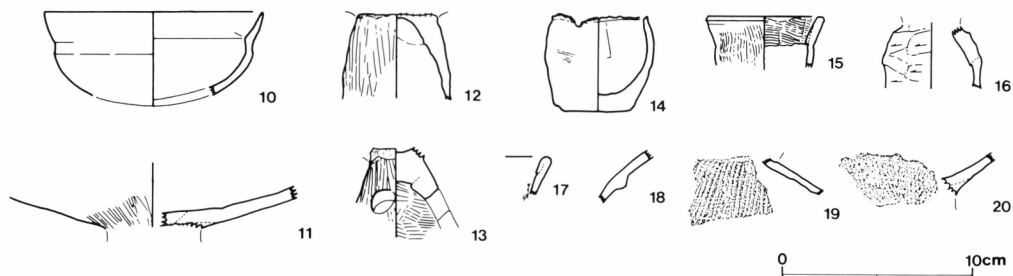
第16図 諏訪遺跡 4号周溝墓第1次調査出土遺物

方台部は他の周溝墓同様確認面直上まで浅間A軽石を含んだ表土層に覆われており、墳丘は遺存していなかった。しかし、土層を観察すると、周溝内端側にはロームブロックを多量に含んだ層の堆積がみられ、墳丘の存在を示唆している。

周溝は調査区北側は幅3.2m程で、浅く立ち上がりもしっかりしないが、南側で外側が急激に括れ幅

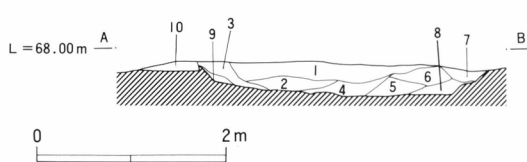


第17図 諏訪遺跡 4号周溝墓出土遺物 (1)



第18図 諏訪遺跡4号周溝墓出土遺物(2)

1.4m程になり、断面形状も逆台形となる。周溝が狭くなった部分は内側の立ち上がりは急で、外側の立ち上がりは比較的緩やかである。この部分には長さ1.8m程の土塊状の落ち込みが見られたため溝中土塊の可能性を考え覆土をフルイにかけたが、遺物の出土はみられなかった。落ち込みの覆土はロームブロックを多量に含んだ黄褐色土の単一層であった。遺物は周溝覆土中より浮いた状態で出土したが、特に周溝の狭くなる部分から多く検出された。また、周溝外から有段口縁壺形土器や甕形土器が集中して出土した箇所があったが、周辺部が攪乱をうけており、この部分に祭祀的な遺構があったのか、二次的に移動したものかは判別できなかった。14のミニチュア土器は方台部の表土中より出土したものである。9の台付甕の脚部は消失した西側付近より出土したものである。



第19図 諏訪遺跡4号周溝墓土層図

4号周溝墓土層

1. 黒色土 ローム粒子・ロームブロックを斑点状に含み、白色粒子含む。砂質あり。
2. 暗褐色土 ローム粒子・小型ロームブロックを霏降り状に含む。黒味がかり4層より暗。1層より明。
3. 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。黒色ブロック混じり。
4. 暗褐色土 ローム粒子を霏降り状に含む、ロームブロックを多く含む。2層より明。
5. 暗褐色土 4層と組成変化しないがやや明るい。
6. 暗褐色土 ローム粒子を霏降り状に含む。5層よりロームブロック量少なくやや暗。4層よりはやや明。
7. 攪乱層 黒色土・ロームブロックを含み、フカフカしてしまらない。
8. 黄褐色土 ローム粒子・大型ロームブロックを霏降り状に含む。5・6層より明。周溝肩部崩壊土。
9. 暗黄褐色土 ローム粒子・大型のロームブロックを含む。3層よりやや暗。
10. 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多く含む。3・9層より暗。

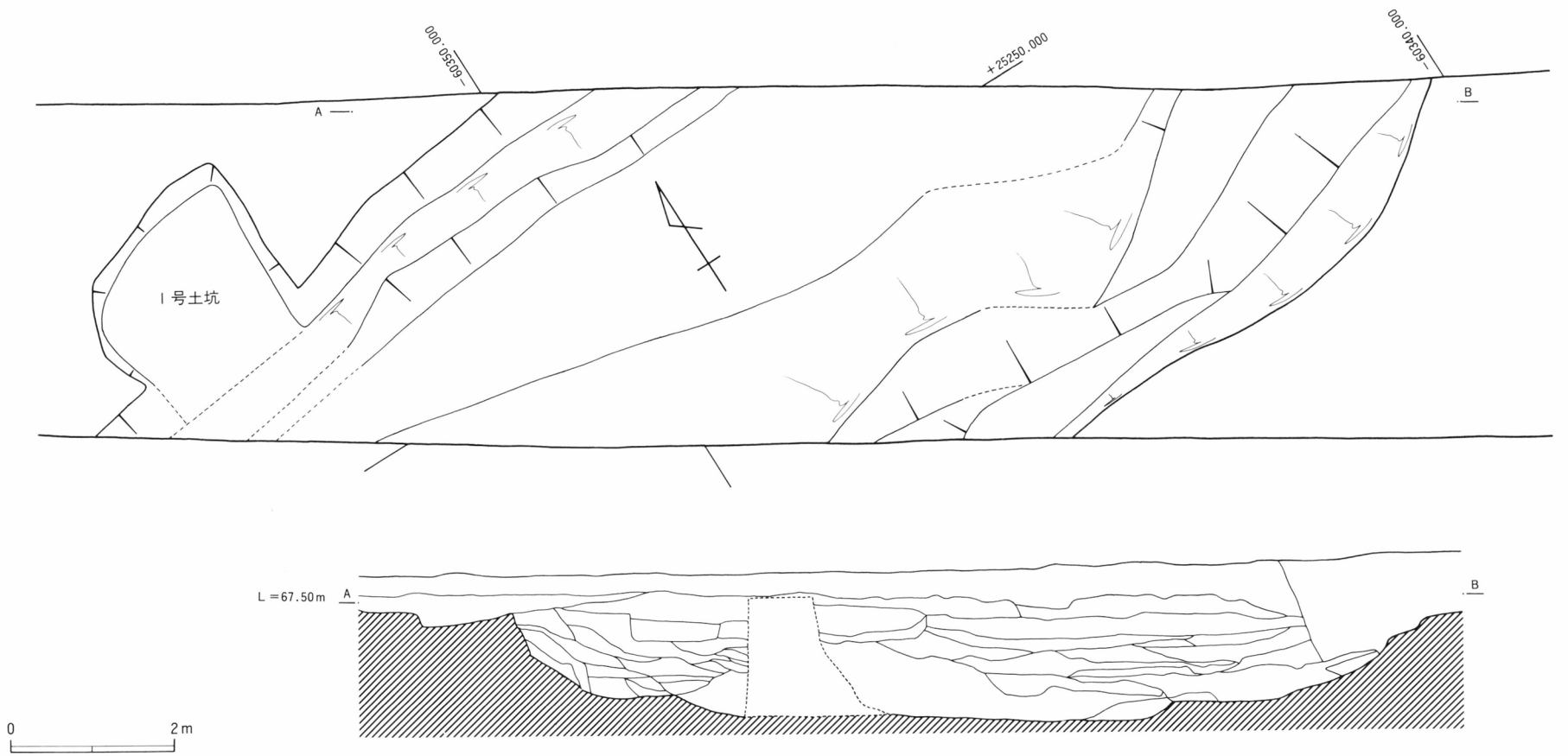
## 2) 溝

溝は12条確認することができたが、9、11～15号溝は覆土の状況から中世以降のものと考えられる。3号溝・5号溝・10号溝は真間期のものであり、16、17号溝は中世のものである。溝は17号溝が南北方向の他は全て東西方向へ走るもので、水流の認められた3号溝・5号溝・10号溝・16号溝は地形に沿って東流する。9・11～15号溝は覆土の状態から同時期のものと推定される。

### 3号溝(第20・21・22図、写真図版6)

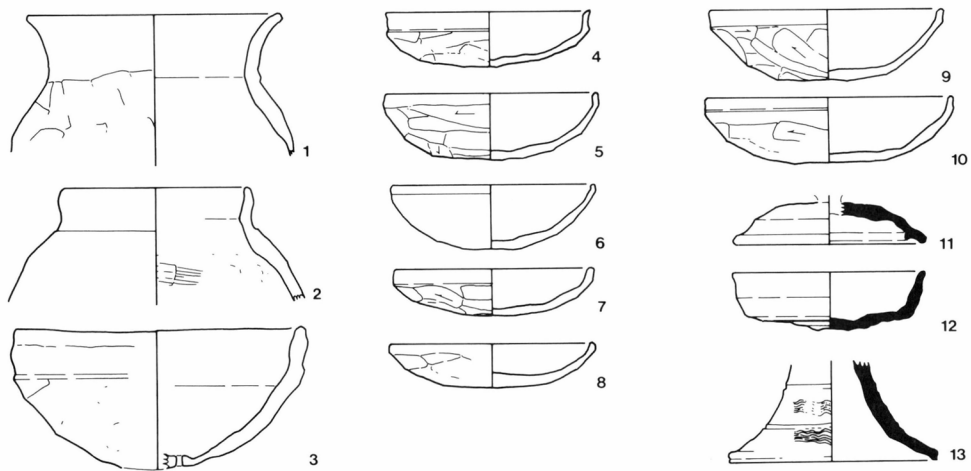
調査区の南東寄りで確認された溝である。幅は溝の上端で約8m、下端で約1.9m、深さは遺構確認面より1.5mほどで流路方向N-85°-Eでほぼ東へむかって走っている。ハードローム層を掘り込んでいるが、溝底付近は暗褐色砂礫層、及び明灰色砂礫層を掘り込んでいて、この砂礫層が帯水層となるようである。溝は砂礫層によって半分程埋没した後に黒色土を主体とした自然堆積によって埋没しており、土層断面をみるかぎりでは溝の再掘削や改修の様子は窺えなかった。溝底の砂礫層と覆土の砂礫層の見極めが難しく溝底の判定にはややあいまいな部分を残すが、遺物の含有の有無や部分的な



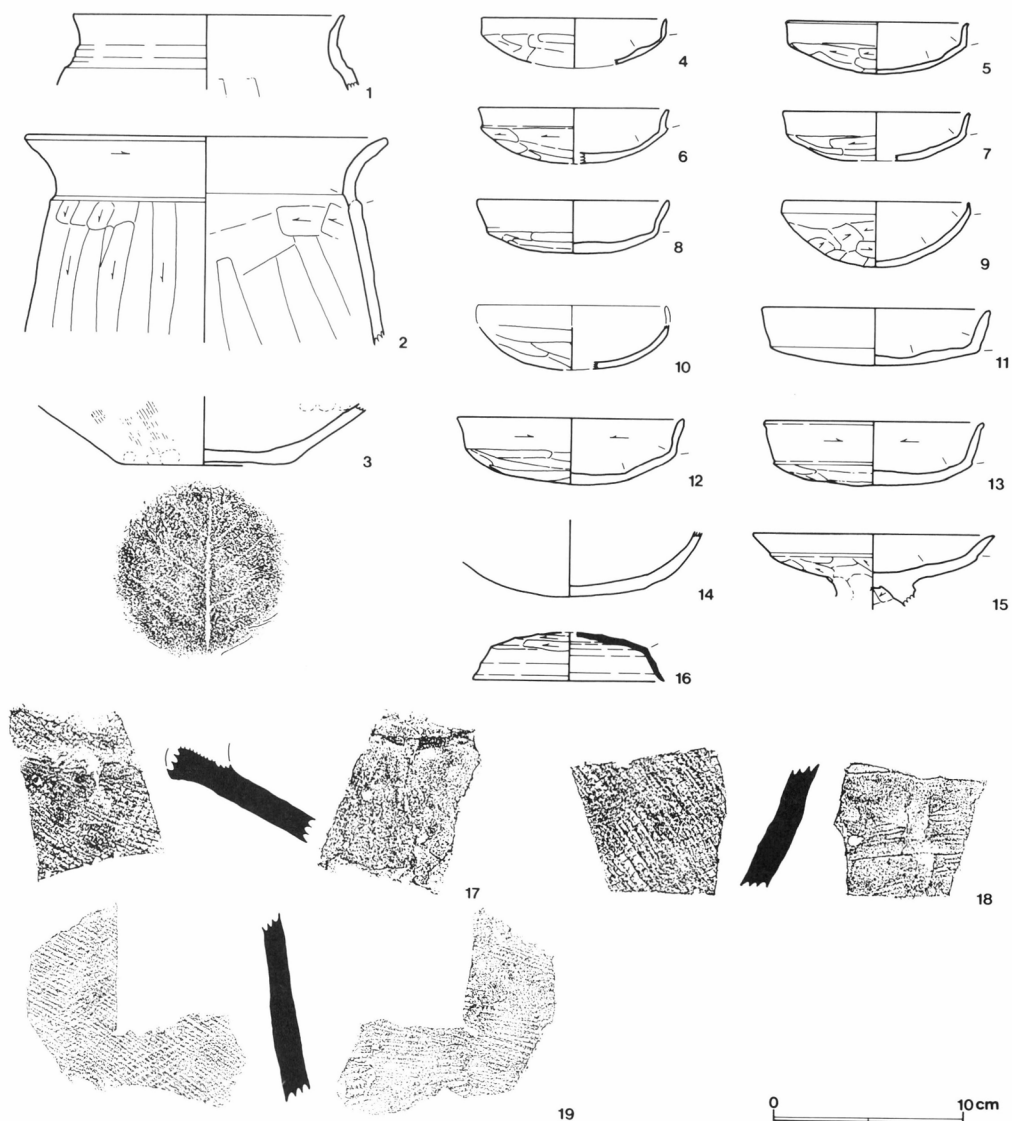


第20図 諏訪遺跡 3号溝





第21図 諏訪遺跡 3号溝・5号溝第1次調査出土遺物

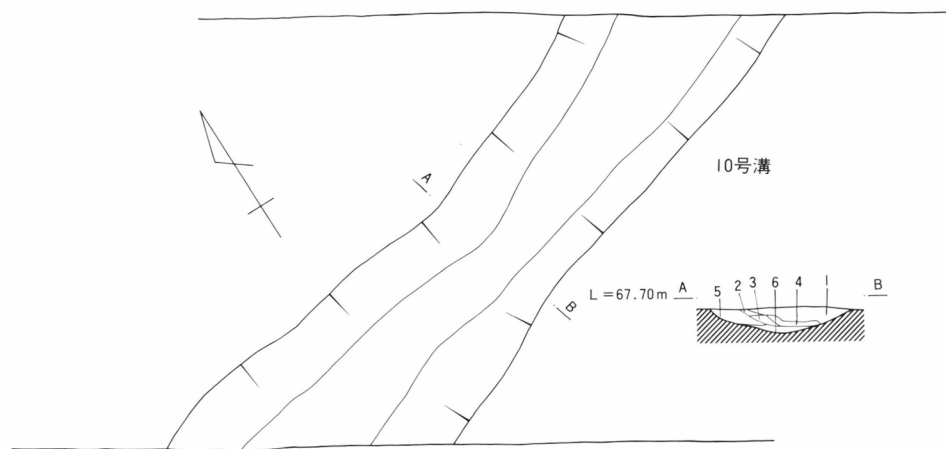
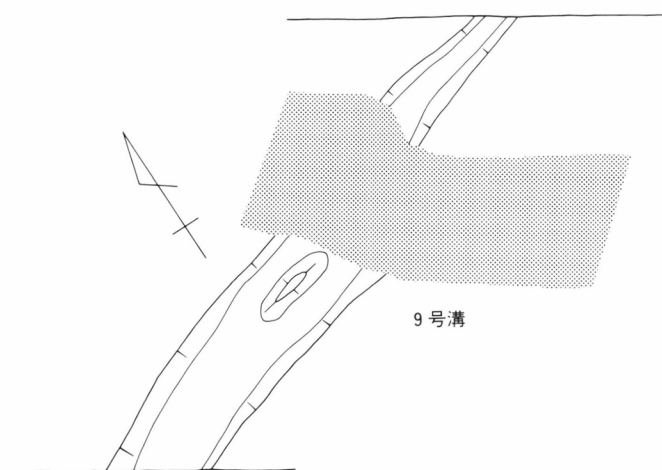
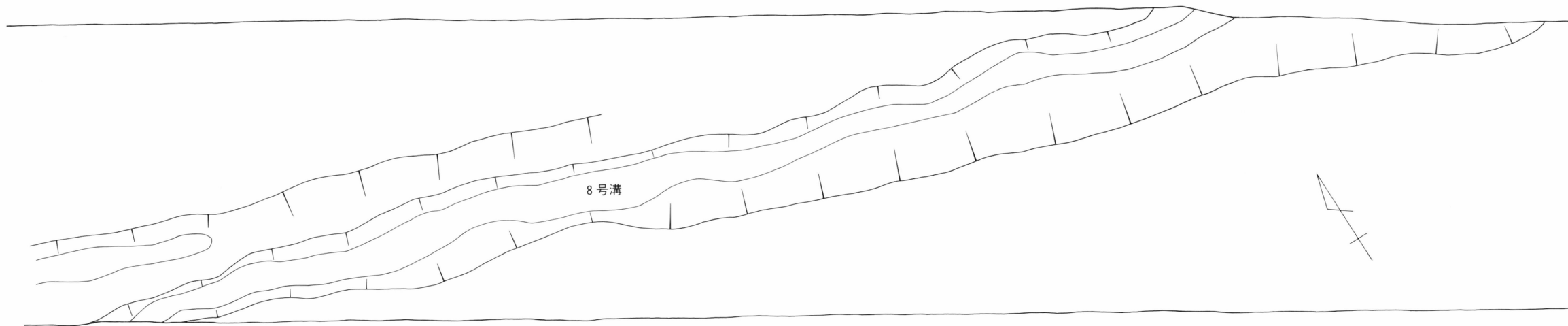


第22図 諏訪遺跡 3号溝出土遺物

断割りの結果から溝底を判断した。したがって部分的に掘り過ぎてしまった箇所が存在することは否めない。

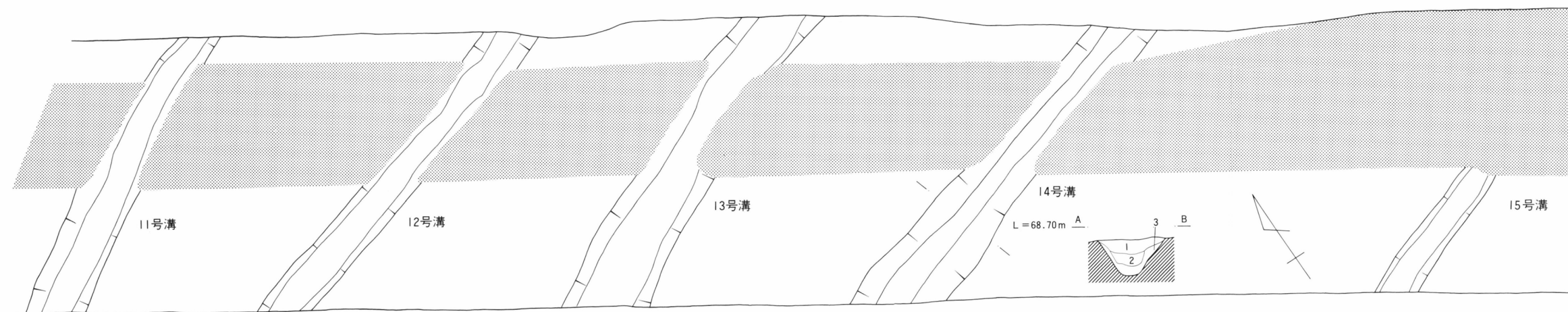
図示した遺物はすべて砂礫層中より出土したものであり、砂礫層より上位の層中より出土した遺物はほとんど皆無であり、完形で出土したものはなく、ほとんどが割れ口や表面の摩滅したものが多かった。3の甕底部は溝底に近い位置より出土したものである。

溝の北岸の肩部に1号土坑が存在するが、3号溝の覆土の黒色土を切っており溝より新しいものである。土層断面を観察すると同様な落ち込みがいくつか確認でき、第1次調査の際にも同様な土坑がいくつか存在している。これらの土坑は1号土坑から出土した内耳土器などから室町期のものと考えられ、少なくとも室町期には3号溝はほぼ完全に埋没していたものと思われる。



- 10号溝土層
- 1. 明褐色土 5層に類似するが鉄分を多量に含む。
  - 2. 純砂層
  - 3. 純砂礫層
  - 4. 明褐色土 砂礫層を主体に明褐色土若干含む。
  - 5. 明褐色土 ローム粒子・パミス・細砂含む。
  - 6. 純砂礫層

- 14号溝土層
- 1. 明褐色土 ローム粒子・細砂・パミスを多量に含む。
  - 2. 明褐色土 細砂を1層より多く含む。
  - 3. 明褐色土 ローム粒子・ロームブロック・パミス多量に含む。

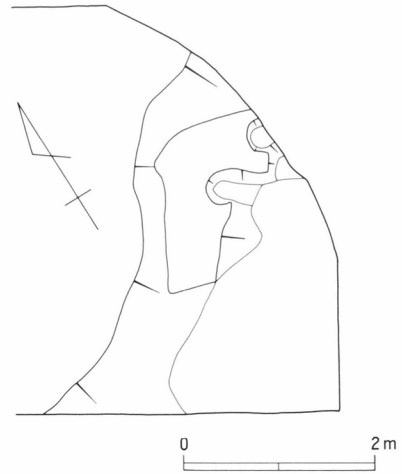


第23図 諏訪遺跡8～15号溝出土遺物



## 5号溝 (第24図)

2号周溝墓と3号周溝墓の間で検出された溝で、大半は道路下にかかっており調査できず、左側の立ち上がり部分を調査したにすぎない。第1次調査の所見を参考にすればN-83°-Eの方向に流下する溝であり、溝幅は上幅が最大で4.65m、下幅が2.90mを測る。遺物は覆土中より土師器片や須恵器片が若干出土したが図示できるものはなかった。



第24図 諏訪遺跡5号溝

## 8号溝 (第23図)

調査区の北西端部で確認された溝で他の多くの溝と異なり、N-108°-Wとやや軸を南にふっている。溝幅は一定しないが、最小部で上幅が0.6m、最大部で1.5mを測る。溝は東に向かって低くなっているが水が流れた積極的な痕跡は窺えなかった。遺物は皆無である。

## 9号溝 (第23図)

調査区北西部の溝群中に存在する溝で、N-63°-Wの方向に走り、中央部に一箇所中島をもつ。調査区中央部は土取りによる攪乱のため破壊されていたが、東側で急激に幅が狭くなる。上幅は最大で1.05m、最小で0.36m、深さは確認面より0.18m、東側にむかって若干低くなる。覆土の状態は11・12・13・14・15号溝と同様である。

## 10号溝 (第23図)

9号溝と11号溝のほぼ中間に存在する溝で、N-65°-Wの方向に走り、覆土中に砂礫が堆積していることから水流のあったことが窺える。9・11~15号溝とは覆土は異なる。溝は調査区中央部で若干括れるがほぼ同幅で、上幅2m、下幅1m前後、深さが確認面から0.3mを測る。第1次調査で確認されたような中島は検出されなかった。遺物は図示できるものはなかったが、砂礫層中より土師器細片が若干出土している。

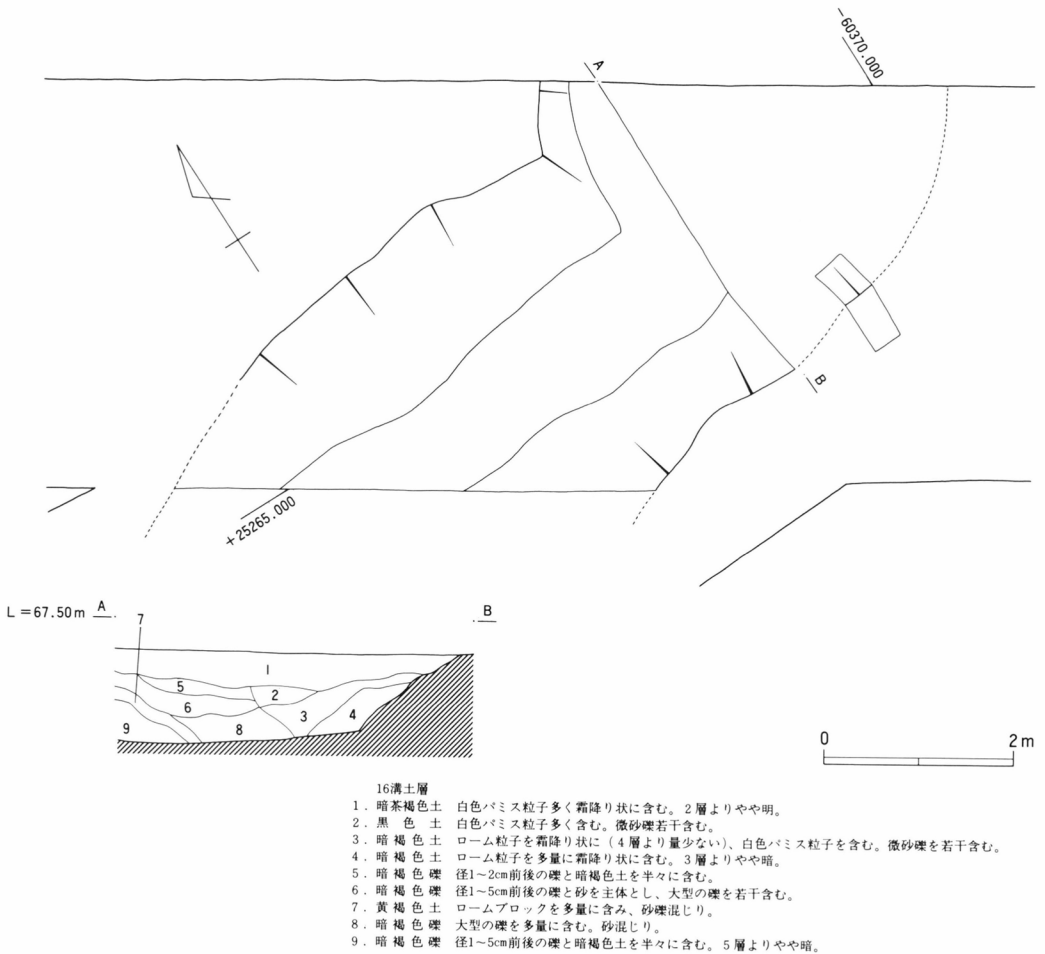
## 11~15号溝 (第23図)

11~15号溝は若干のばらつきはあるものの一定の間隔をもって並走する溝で、覆土の状況や溝の形状は極めて類似している。断面の形状は逆台形で、東にむかって緩やかに傾斜しているが、水流があったかは不明である。遺物の出土は皆無であったが、中世以降になると推定される。

16号溝 (第25・26図、写真図版6)

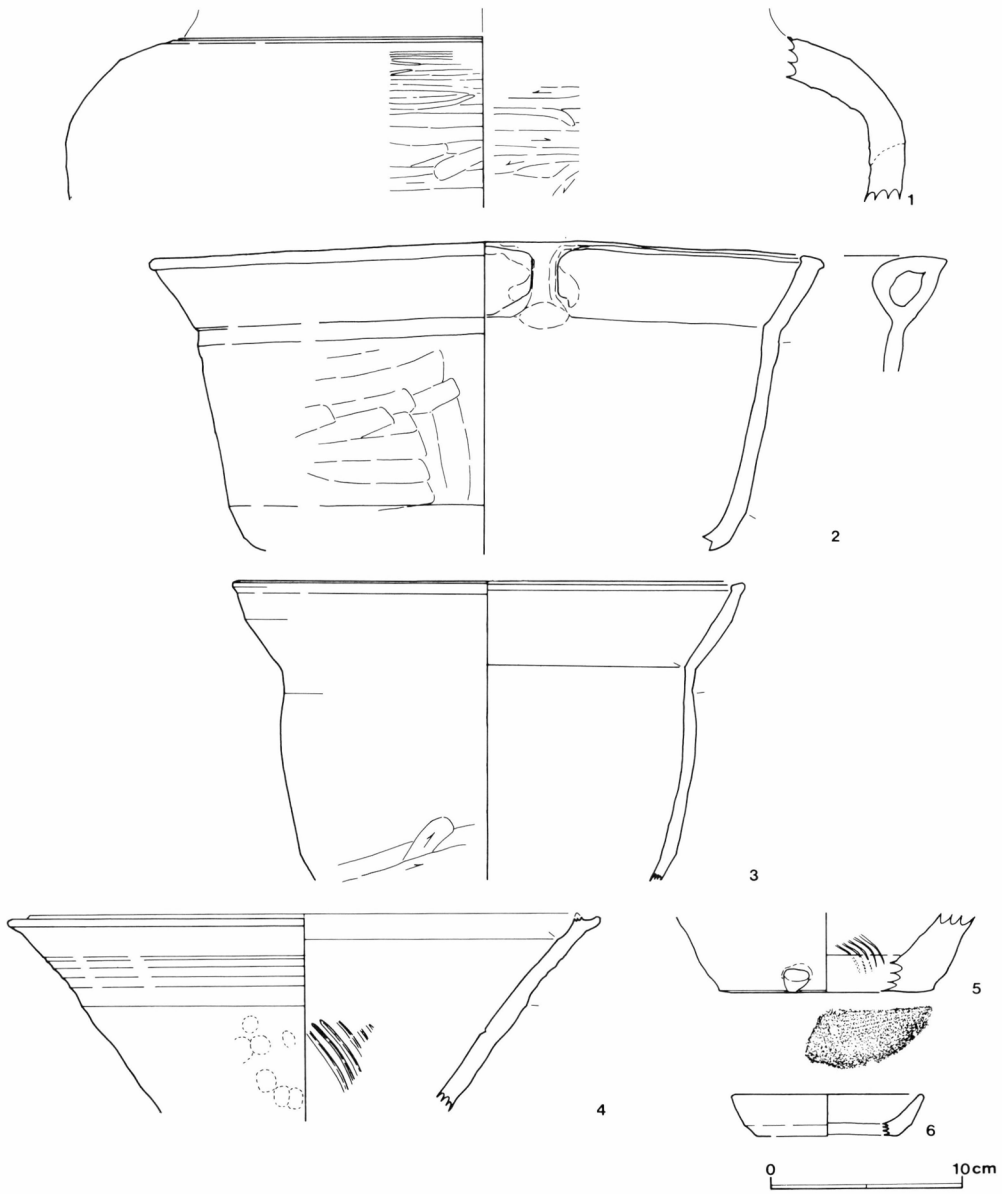
3号溝の西側で検出された溝で、N-80°-Wの方向に走る。東側の部分については当初遺構の検出が不明瞭であったため、3号溝の排土置場となってしまう調査ができなかった。また支線排水路第2号の調査区部分は調査日程等により全体を開掘することはできず、部分的にトレンチを設定し開掘した。したがって部分的な調査であるが、上幅3.6m、下幅1.3mで、溝底は礫混じりの黄褐色土層を掘り込んでおりほぼ平坦であるが、若干東に向かって傾斜している。左側の外端は調査区北側で折れ曲がるが、そのまま第1次調査で検出された部分につながるものと思われる。土層を観察すると5~9層は砂礫層であり水流のあったことが窺えるが、2~4層の堆積部分は5~9層を切って堆積しているように見え、あるいは掘り直しが行われた可能性もある。

遺物は覆土中から内耳土器・摺鉢・かわらけなどが出土しており、中世の所産である。



第25図 諏訪遺跡16号溝





第26図 諏訪遺跡16号溝出土遺物

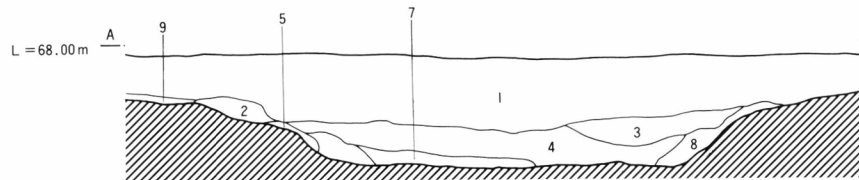
17号溝 (第27・28図、写真図版3・6)

16号溝の北側で確認された溝で、N-5°-Eの方向に走り、南に向かって緩やかに深くなり、16号溝と直行する位置にある。16号溝において部分的に設定したトレンチにおいても、17号溝と合流する部分は確認されておらず、途切れるものと思われる。溝は東側の立ち上がりがほぼ直角に折れ曲がり、方形の緩斜面を構成している。この部分には17号溝に伴う2基の浅い土坑が存在するが、南側のもの



17号溝土層

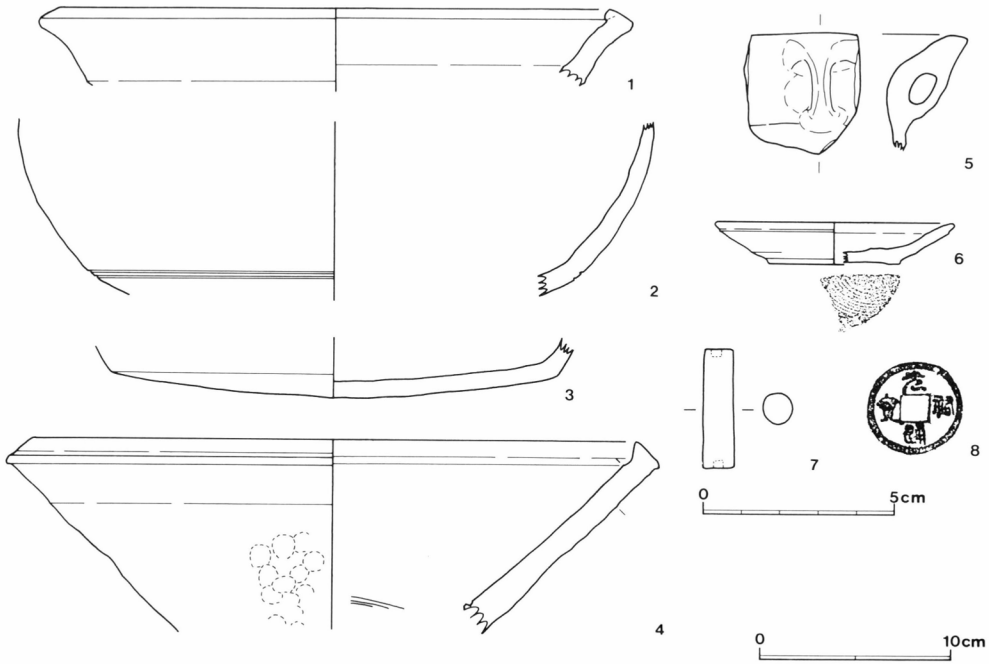
- 1. 表土 土地改良時の客土層。ローム・礫・ビニール等含む。
- 2. 暗褐色土 ローム粒子・微小ロームブロックを霜降り状に含む。固くしまる。4層より暗。
- 3. 暗褐色土 ローム粒子・微小のロームブロックを含む。黒味がかり4層より暗。
- 4. 暗黄褐色土 ローム粒子を霜降り状に含む。小砂利若干含む。3層より明。7層より暗。
- 5. 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。黒色ブロックを若干含む。
- 6. 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを霜降り状に含む。黒色土ベース。4・7層より明。
- 7. 暗褐色土 ローム粒子を多量に霜降り状に含む。4層より明。6層より暗。
- 8. 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。黒色ブロック混じり。
- 9. 暗褐色土 浅間A軽石・ローム粒子含む。



第27図 諏訪遺跡17号溝



から管玉状の石製品が1点出土している。遺物は溝の東岸が折れ曲がる部分より集中して検出し、内耳土器・摺鉢・かわらけが出土しており、16号溝同様中世の所産である。

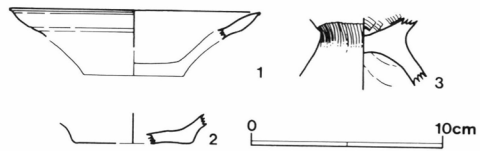


第28図 諏訪遺跡17号溝出土遺物

### 3) その他の遺構

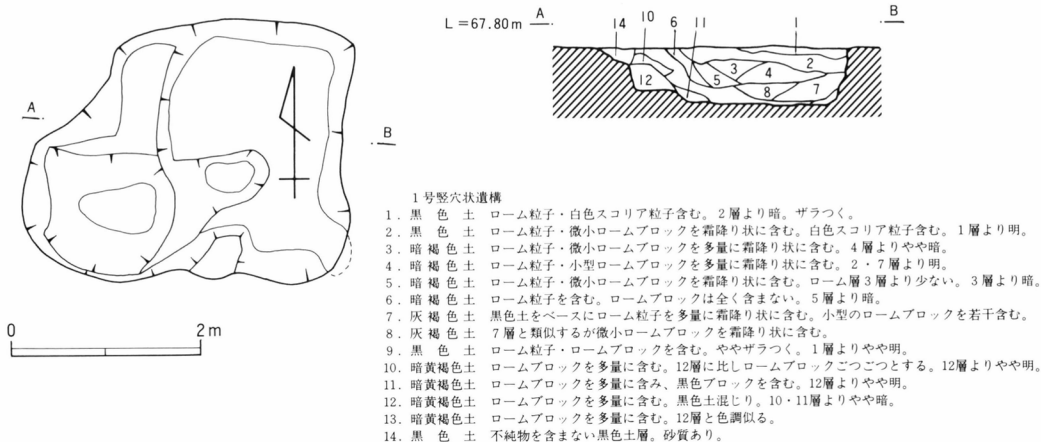
#### 1号竪穴状遺構 (第29・30図、写真図版3)

支線排水路第2号部分の調査区より検出されたもので、16号溝の北側、17号溝の西側に位置する。西側は攪乱によって壁および床面が破壊されているが、南北2.7m、東西2.5mのほぼ正方形に近い平面プランである。床面は平坦で固くしまっており、中央やや南よりに摺鉢状の浅いピットをもつが、浅いこともあり柱穴となるかは不明である。西側の壁よりには幅40cmのベット状に1段高く掘り残した部分が存在しているが、床面同様に固くしまっている。覆土はロームブロックを霜降り状に含んだ層(3、4、5、6、7、8層)を主体としており、人為的に埋められた可能性が高い。



第29図 諏訪遺跡1号竪穴状遺構出土遺物

遺物は覆土中より台付甕の台部とかかわらけが出土しており、所謂中世の竪穴状遺構として捉えておく。



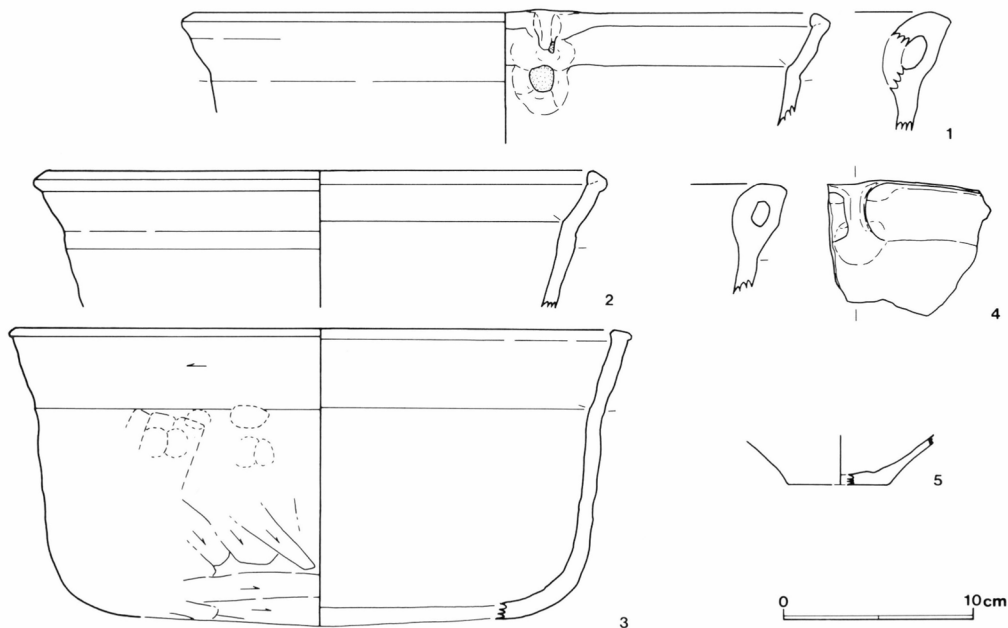
第30図 諏訪遺跡1号竪穴状遺構

### 1号土坑 (第20・31図、写真図版4・6)

3号溝西側の外端を切って存在する土坑で3号溝より新しい。南側は調査区外にかかってしまい規模は不明であるが、幅2.4m、長さ4m以上の長方形の土坑である。

遺物は底面上及び底面より若干浮いており、北側より流れ込む状態で出土したものもある。出土したのは内耳土器、かわらけで、中世の所産になるものである。

第1次調査においてもこの周辺より同様な長方形土坑が確認されておりそれらと同様なものと思われる。遺物の出土状態から考えて中世のゴミ穴と推定される。



第31図 諏訪遺跡1号土坑出土遺物

諏訪遺跡1号周溝墓出土遺物（第5図）

器種	番号	法量(cm)	特	徴
壺	1	口径(16.2)	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒多 小石	整・外面 肩部と頸部11本/1cmの縦位ハケ調整 口辺部ヨコナデ 内面 10~11本/1cmのハケ 焼・普 色・暗橙褐色 残・1/2
壺	2	底径( 8.8)	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 小石 砂粒 微砂 成・上り底	整・外面 ハケ後ナデ 底面ミガキ 内面 ナデ 焼・普 色・淡黄褐色 残・底部1/2
埴	3	底径 3	胎・角閃石 石英 白色粒子 砂粒	整・外面 底面ミガキ 底部ヘラケズリ後ミガキ 内面 底部ヘラナデ 焼・普 (有黒斑) 色・橙褐色 残・底部 胴部一部
埴	4	底径 3.4	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 成・上り底	整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 底部螺旋状指ナデ 胴部ナデ 焼・普 色・暗橙褐色 残・底部 胴部一部

諏訪遺跡2号周溝墓出土遺物（第10図）

器種	番号	法量(cm)	特	徴
壺	1		胎・角閃石 雲母 石英 珪岩粒 白色粒子 酸化鉄粒多	砂粒多 成・胴部 幅3cm程の粘土帯積上げ 接合痕明瞭 整・外面 5~6本/1cmハケ 肩部から胴中位にかけてハケ後ミガキ風ヘラナデ 内面 口縁部横位ハケ 頸部指オサエ 胴部斜位板ナデ 焼・良 色・赤褐色 (内面黄褐色) 残・図示1/2
壺	2	口径(15.8)	胎・角閃石 雲母 石英 珪岩粒多 白色粒子 酸化鉄粒	整・内外面ヘラケズリ後横位ミガキ 焼・普 色・橙褐色 残・1/2
甕	3	口径(20.4)	胎・角閃石 雲母 石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂粒多	整・外面 口縁部9本/1cm縦位ハケ後ヨコナデ 内面 口縁部7本/1cm横位ハケ後ミガキ 焼・普 色・暗茶褐色 使・外面炭化物付着 残・1/2
甕	4	口径(15.2) 底径 5.4	胎・角閃石 雲母 酸化鉄粒 砂粒 小石 成・胴部粘土帯積上げ	整・外面 口縁部7~8本/1cm縦位ハケ後ヨコナデ 胴部 横位ハケ 底部縦位ハケ 内面 口縁部7本/1cmハケ 胴部ナデ 底部ヘラオサエ 口縁部ヨコナデ 焼・やや悪 色・明橙褐色 残・1/2
壺	5	底径( 6.0)	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 小石	整・外面 底部指頭オサエ 胴部ミガキ 底面ヘラケズリ 内面 ミガキ 焼・普 色・淡橙褐色 残・図示1/2
壺	6	底径 6.6	胎・角閃石 雲母 白色粒子 酸化鉄粒	整・外面 底面4本/2cmのハケ 底部4本/2cmのハケ調整 内面 ヘラナデ 焼・普 色・赤褐色 内面黒褐色 残・図示1/2
台付甕	7		胎・角閃石 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒	整・外面 脚部6本/1cmのハケ 内面 指ナデ 焼・普 色・暗橙褐色 残・図示完
小型器台	8		胎・角閃石 石英 珪岩粒 白色粒子 酸化鉄粒	整・外面 脚部縦位ヘラミガキ 内面 脚部横位ヘラケズリ 裾部ヨコナデ 形・孔は4孔 器受部中央穿孔 焼・普 色・暗赤褐色~淡黒褐色 残・脚部一部
壺	9		胎・石英 雲母 白色粒子 微砂粒多	整・外面 口縁部5本/1cmのハケ後口縁端部ヨコナデ 内面 板状工具ナデ 焼・普 色・淡橙褐色 残・口縁部一部

須恵 器坏	10	口径(9.4) 底径	胎・雲母 白色粒子 微砂含み緻密 整・外面 底面回転ヘラケズリ 底部ロクロナデ 内面 底面及び底部ロクロナデ 焼・良 色・明灰色 残・底面¼
----------	----	---------------	--

諏訪遺跡3号周溝墓出土遺物 (第15図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
埴	1	口径 12.0 底径 4.3	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 成・胴下半と頸部に明瞭接合痕整・外面 底部ヘラケズリ 胴部斜位ミガキ 頸部横位ミガキ 内面ナデ口縁部内外面縦位ミガキ 焼・普色・赤褐色 出・21層 残・¾
小型 器台	2	口径 9.8 器高 10.0 裾径 13.4	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 整・内外面ミガキ 器受部内面放射状ミガキ 口唇部及び裾部ヨコナデ 形・孔は4孔 焼・良(有黒斑) 出・6層 残・完形
小型 器台	3	口径 9.2 器高 10.0 裾径 12.5	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 ミガキ 内面 裾部ヨコナデ 脚部ヘラナデ(木口状工具オサエ有) 器受部ミガキ 口唇部内外面ヨコナデ 形・孔は3孔 裾端部は端正 焼・やや甘(有黒斑) 出・18層 残・完形

諏訪遺跡4号周溝墓出土遺物 (第17・18図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
壺	1	口径(15.1) 器高 26.6 器高 26.6 底径 7.1	胎・石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 緻密 成・胴下半・胴中位肩部に明瞭な接合痕 底部は円盤状 整・外面 底面及び底部ヘラケズリ 胴部横位ミガキ後縦位ミガキ 頸部縦位ハケ後ヨコナデ 口縁部斜位ミガキ 内面 底部及び胴部板状工具ナデ 肩部指頭押え 口縁部縦位ミガキ 頸部横位ミガキ 形・最大径胴部中位 口縁部段部は強くナデつけることにより成形 焼・普(有黒斑) 色・明橙褐色 出・周溝外 残・胴部¾ 口縁部¼
壺	2	底径 8.0	胎・角閃石 白色粒子 酸化鉄粒 微砂粒 成・上り底 整・外面 底面ヘラケズリ 胴部8本/1cmのハケ 内面 底部ナデ(ヘラオサエ) 胴部板状工具ナデ 焼・普(有黒斑) 色・明橙褐色 出・方台部表土 使・内面風化剝離 残・図示完
壺	3	底径 8.6	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 整・外面 底部ナデ 胴部5本/1cmの縦位ハケ 内面 4~5本/1cmの横位ハケ 焼・普 色・赤褐色 残・底部 胴部¾
壺	4		胎・石英 白色粒子 酸化鉄粒 成・頸部接合痕明瞭 整・外面 胴部横位ミガキ 肩部口縁部4本/1cmのハケ 口縁部ハケ後ヨコナデ 内面 肩部指頭オサエ 胴部板状工具ナデ 胴部接合面ハケ調整後接合 焼・普(有黒斑) 色・橙褐色 出・周溝外 残・胴部¾ 口縁部¼
甕	5	口径(16.7)	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 整・外面 胴部8本/1cmの斜位ハケ 口縁部縦位ハケ後ヨコナデ 内面 胴部ナデ 肩部板状工具ナデ 口縁部横位ハケ 色・暗茶褐色 使・外面胴部上半及び口縁部、内面胴部下半 炭化物付着 出・周溝外 残・胴部¾ 口縁部¼
甕	6	口径(19.8)	胎・角閃石 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 砂粒 整・外面 胴部7本/1cmの斜位ハケ 肩部横位ハケ 口縁部縦位ハケ後ヨコナデ 内面 胴部ヘラナデ後ナデ 胴部ヘラオサエ 口縁部横位ハケ 焼・普 色・暗茶褐色 使・炭化物付着 残・胴部¾ 口縁部¼
埴	7	底径 4.3	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 小石多 胎土粗 整・外面 底面と胴部ヘラケズリ 底部指頭オサエ 内面 板状工具ナデ 焼・悪(有黒斑) 色・橙褐色~暗橙褐色 使・内外面風化著しい 出・周溝外 残・底部 胴部¾

壺	8	底径 4.6	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 整・外面 底部3本/1cmのハケ 胴部ハケ後ナデ 色・赤褐色 残・底面 底部 $\frac{3}{4}$ 胴部一部
台付甕	9	裾径 10.6	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 砂粒 整・外面 ナデ 内面 ナデ 裾部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 残・裾部 $\frac{1}{2}$
埴	10	口径(11.4) 器高(5.0)	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 整・外面 体部ミガキ 内面 ナデ 口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ 焼・普 (有黒斑) 色・暗橙褐色 残・体部 $\frac{1}{4}$ 口縁部 $\frac{1}{2}$
高坏	11		胎・角閃石 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 砂粒 小石 整・外面 ミガキ 内面 風化不明瞭 焼・普 色・橙褐色 残・坏底部一部
脚	12		胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 ハケ 内面 ナデ 形・上面は本体と剝離 焼・普 色・橙褐色 残・図示 $\frac{1}{2}$
小型器台	13		胎・角閃石 雲母 石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 脚部ハケ後ミガキ 内面脚部横位ハケ 形・孔は3孔 焼・普 (有黒斑) 残・図示完
ミニチュア	14	口径 5.1 器高 5.1	胎・白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 ナデ 内面 ヘラナデ (ヘラオサエ有) 口唇部は工具によるオサエ 焼・普 (有黒斑) 色・淡橙褐色 出・方台部表土中 残・完形
ミニチュア	15	口径(6.0)	胎・石英 白色粒子 微砂 成・口縁部折り返し 整・外面 ヨコナデ後5本/1cmの縦位ハケ 内面 口縁部5本/1cmのヨコハケ 頸部ナデ 焼・普 色・暗橙褐色 残・図示 $\frac{1}{4}$
ミニチュア	16		胎・石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 ヘラケズリ 内面 ナデ 焼・普 色・赤褐色 残・図示 $\frac{1}{4}$
壺	17		胎・雲母 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒多 焼・普 (有黒斑) 色・黄白色 残・口縁部一部
壺	18		胎・雲母 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒多 整・外面 横位ミガキ 内面 ナデ 焼・悪 形・口縁部粘土貼付による稜 色・黄橙色 残・口縁一部
S字台付甕	19		胎・石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 肩部4本/1cmのハケ後肩横線 頸部ヨコナデ 内面 指オサエ 焼・普 色・黄白色 残・肩部一部
S字台付甕	20		胎・角閃石 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 4本/1cmのハケ 内面 ナデ 焼・普 色・暗褐色 残・底部一部

諏訪遺跡3号溝出土遺物 (第22図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
短頸壺	1	口径(14.3)	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 微砂多 整・外面 胴部ヘラケズリ内面 胴部ヘラオサエ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色
甕	2	口径(19.0)	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 整・外面 胴部ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・淡橙褐色 残・図示 $\frac{1}{4}$

甕	3	底径 9.1	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 風化礫多 成・上り底 底面木葉痕あり 整・外面 縦位ハケ後横位ヘラケズリ 内面 底部と胴部ナデ 焼・普 (有黒斑) 色・淡橙褐色 使・全体に摩滅著しい 残・図示完
坏	4	口径(9.7) 器高(2.7)	胎・角閃石 白色粒子 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・ $\frac{1}{6}$
坏	5	口径(9.4) 器高 2.8	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 残・体部 $\frac{1}{2}$ 口縁部 $\frac{1}{3}$
坏	6	口径(9.9) 器高(2.9)	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残 $\frac{1}{3}$
坏	7	口径(9.8) 器高(2.6)	胎・角閃石 雲母 酸化鉄粒 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・ $\frac{1}{6}$
坏	8	口径(10.0) 器高 2.9	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 使・摩滅著しい 残・ $\frac{1}{4}$
坏	9	口径 9.8 器高 3.5	胎・角閃石 石英 雲母 酸化鉄粒多 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・ $\frac{3}{4}$
坏	10		胎・石英 雲母 白色粒子 微砂 砂粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 焼・普 色・橙褐色 使・摩滅著しい 残・ $\frac{3}{4}$
坏	11	口径(11.8) 器高 3.0	胎・酸化鉄粒 微砂 整・体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 残・体部 $\frac{1}{2}$
坏	12	口径 11.9 器高 3.5	胎・角閃石 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 小石 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 残・ $\frac{3}{6}$
坏	13	口径(11.4) 器高 3.4	胎・角閃石 石英 白色粒子 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 使・口唇部摩滅 残・ $\frac{1}{4}$
坏	14		胎・角閃石 石英 白色粒子 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ 焼・普 残・ $\frac{1}{2}$
坏	15	口径(12.6)	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 整・外面 坏底部ヘラケズリ 脚部 ユビナデ 内面 脚部横位ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 残・坏底部 $\frac{3}{4}$ 口縁部 $\frac{1}{2}$
須恵器蓋	16	口径(10.0) 器高(2.5)	胎・硅岩粒 白色粒子 微砂 整・外面 天井部手持ちヘラケズリ 口縁部ロクロナデ 焼・普 色・淡灰白色 残・ $\frac{1}{6}$
須恵器甕	17		胎・白色粒子 酸化鉄粒 小石 整・外面 格子目タタキ 頸部ヨコナデ 内面 青海波タタキ後ナデ 頸部ヨコナデ 焼・良 色・暗灰色 残・肩部一部
須恵器甕	18		胎・白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タタキ後横位板状工具ナデ 焼・良 色・暗灰色 残・胴部一部
須恵器甕	19		胎・白色粒子 酸化鉄粒 小石 整・外面 平行タタキ 内面 8本/2cmの横位ハケ 焼・良 色・黒灰色 残・胴部一部



諏訪遺跡16号溝出土遺物 (第26図)

器種	番号	法量(cm)	特	徴
伏鉢 ?	1		胎・石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 砂粒多 小石 整・外面 横位ミガキ ケズリ 頸部ヨコナデ 内面 横位ユビナデ 形・頸部に一条の沈線 焼・普(瓦質) 色・暗灰色 残・ 図示㍻	
内耳 土器	2	口径 35.6 器高(16.3)	胎・角閃石 石英 雲母多 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 成・耳部は貼り付け 整・外面 横位ヘラケズリ後ナデ 底部ヨコナデ 内面 ナデ 耳部ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普(軟質) 色・外面 黒褐色～暗茶褐色 内面 黒灰色 使・外面 炭化物付着 内面 底部炭化物付着 底部欠損面にも炭化物付着し底面を抜いた状態で使用 残・底面欠損	
内耳 土器	3	口径(26.8)	胎・石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 整・外面 体部指オサエ後ナデ底部横位ヘラケズリ 内面 ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・暗茶褐色 使・外面 炭化物付着 内面 底面被熱器面荒れ 残・図示㍻	
すり 鉢	4	口径(30.8)	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 整・外面 体部指頭オサエ後ナデ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ 形・すり目現存6条 焼・普 色・暗灰色 使・内面体部、口唇部摩滅 残・図示㍻ 備・在地産	
すり 鉢	5	底径(11.2)	胎・雲母 珪岩粒 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒多 成・底面糸切り 整・内外面ナデ 形・すり目は現存5条 焼・普 色・明灰白色 使・内面使用痕 残・図示㍻ 備・在地産	
かわ らけ	6	口径(10.0) 器高( 2.2)	胎・角閃石 白色粒子 酸化鉄粒 整・内外面ナデ 焼・普 色・黄褐色 残・㍻	

諏訪遺跡17号溝出土遺物 (第28図)

器種	番号	法量(cm)	特	徴
すり 鉢	1	口径(31.1)	胎・石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂多 整・内外面横位ナデ 焼・普(瓦質) 形・口縁 端部折り返し 色・暗灰色 残・口縁部一部	
内耳 土器	2		胎・雲母 珪岩粒 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒多 整・外面 胴部ナデ 底部ユビナデ 内面 ナデ 形・底部に2条の沈線 焼・普(軟質) 色・外面暗茶褐色 内面黄白色 使・ 外面炭化物付着 残・図示㍻	
内耳 土器	3	底径(23.3)	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 砂粒 小石(砂質) 成・離砂痕 整・ 底部 内外面ナデ 焼・普(軟質) 色・淡灰白色(底面 暗赤褐色) 使・外面炭化物付 着 残・㍻	
すり 鉢	4	口径(34.2)	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂多 整・外面 体部指頭痕 内面 体 部横位ナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普(軟質) 色・暗灰色 残・図示㍻ 備・在地産	
内耳 土器	5		胎・石英 雲母 酸化鉄粒 砂粒多 整・内外面ヨコナデ 耳部ナデ 焼・普(軟質) 色・ 外面 暗褐色 内面 淡黄白色 使・外面炭化物付着 残・口縁部一部	
かわ らけ	6	口径(12.4) 器高( 2.2) 底径( 6.9)	胎・角閃石 白色粒子 酸化鉄粒 微砂多 成・底面回転糸切り 整・内外面ロクロナデ 焼・普 残・㍻	

管玉状石製品	7	全長 3.15 径 0.8	管玉状の石製品 両側端に深さ0.2cmの抉り 明黄白色 砂岩質
銅銭	8	径 2.5	元祐通寶 宋銭 1086年初鋳

諏訪遺跡1号竪穴状遺構出土遺物 (第29図)

器種	番号	法量(cm)	特	徴
かわらけ	1	口径(13.0)	胎・雲母 白色粒子 酸化鉄粒 緻密 整・内外面ロクロナデ	焼・普 色・暗橙褐色 残・ 図示½
かわらけ	2	底径( 6.2)	胎・角閃石 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 微砂 成・回転糸切り 整・ロクロナデ	焼・普 色・橙褐色 残・図示¼
台付甕	3		胎・白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 小石多 整・外面 脚部ハケ後ナデ 内面 脚部指ナデ 底面ハケ	焼・普 色・暗橙褐色 残・図示½

諏訪遺跡1号土坑出土遺物 (第31図)

器種	番号	法量(cm)	特	徴
内耳土器	1	口径(34.0)	胎・雲母 白色粒子多 小石 成・耳部貼り付け 整・体部ナデ 口縁部ヨコナデ	焼・普 残・口縁部一部 備・陶質
内耳土器	2	口径(30.0)	胎・石英 珩岩粒 白色粒子 微砂多 緻密 整・外面 体部指頭オサエ後ナデ 内面 体部ナデ 口縁部ヨコナデ	焼・普 色・暗灰色 使・外面炭化物付着 残・図示½ 備・陶質
内耳土器	3	口径(32.4) 器高(15.3)	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 砂粒 小石 整・外面 底部ヘラケズリ 体部指頭オサエ後ナデ 内面 指ナデ 口縁部内外面ヨコナデ	焼・普(軟質) 色・外面黒褐色 内面茶褐色 使・外面炭化物付着 残・½
内耳土器	4		胎・石英 雲母 白色粒子 微砂多 成・耳部貼り付け 整・外面 体部指頭オサエ後ナデ 口縁部ヨコナデ 内面 ナデ	焼・普 色・暗灰白色 残・口縁部一部 備・陶質
かわらけ	5	底径( 5.4)	胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 成・底面回転糸切り 整・内外面ロクロナデ	焼・普 色・橙褐色 残・½

## IV 久城前遺跡（B地点）の調査

### 1 第1次調査の概要

久城前遺跡は1975年に関越高速自動車道の建設に先立ち、埼玉県教育委員会によって調査され、溝8条・井戸2基を検出しており、住居址等の建物は確認されなかった。溝は幅4～5mの溝2と幅6.7m～12.8mの溝6を中心とし、他の溝は溝2・溝6の取水・排水溝的用途を持つものと考えられており、いずれも地形に沿って東流している。調査者は溝2を基幹水路とし諏訪遺跡3号溝に、溝6を小河川状の排水路とし諏訪遺跡5号溝にそれぞれつながるものと推定している。溝中の遺物は溝1・溝2・溝3・溝6の砂礫層中より摩滅の著しい土器が出土しているが、溝2からは鉄製の塊が出土している。また、井戸からは馬歯が出土しているが他の遺物は皆無であった。

### 2 第2次調査の遺構と遺物

#### 6号溝（第32・33・34・35図、写真図版4・6）

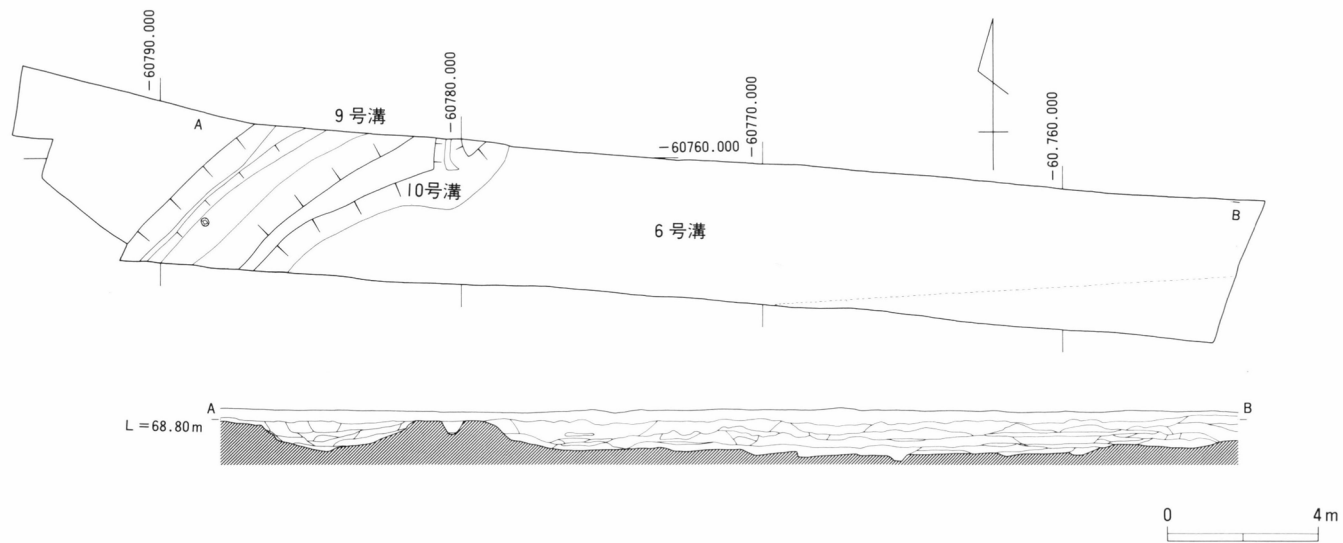
第1次調査の溝6の延長部にあたり、北東に向かって流下する。左岸にそって9号溝が存在し、左岸北側では10号溝が合流する。

溝中は上層は黒色土を中心とした土層で埋没していたが、下層には礫を多く含んだ層が堆積していた。遺物が出土したのは主にこの礫層中からであり、割れ口や口縁部が摩滅しているものが大多数であり、流下したものと推定される。土層の堆積は自然堆積によるが、部分的に乱れている箇所もあり水流が一定でなかったことを物語っている。左岸はハードロームの立ち上がりが明瞭に検出できたが西岸は調査区内では立ち上がりを確認することができなかった。しかし、図中破線部において溝底である黄褐色砂礫層が立ち上がりはじめており、この部分よりゆるやかに立ち上がるものと推定される。したがってこの部分で大きく蛇行するものと思われる。

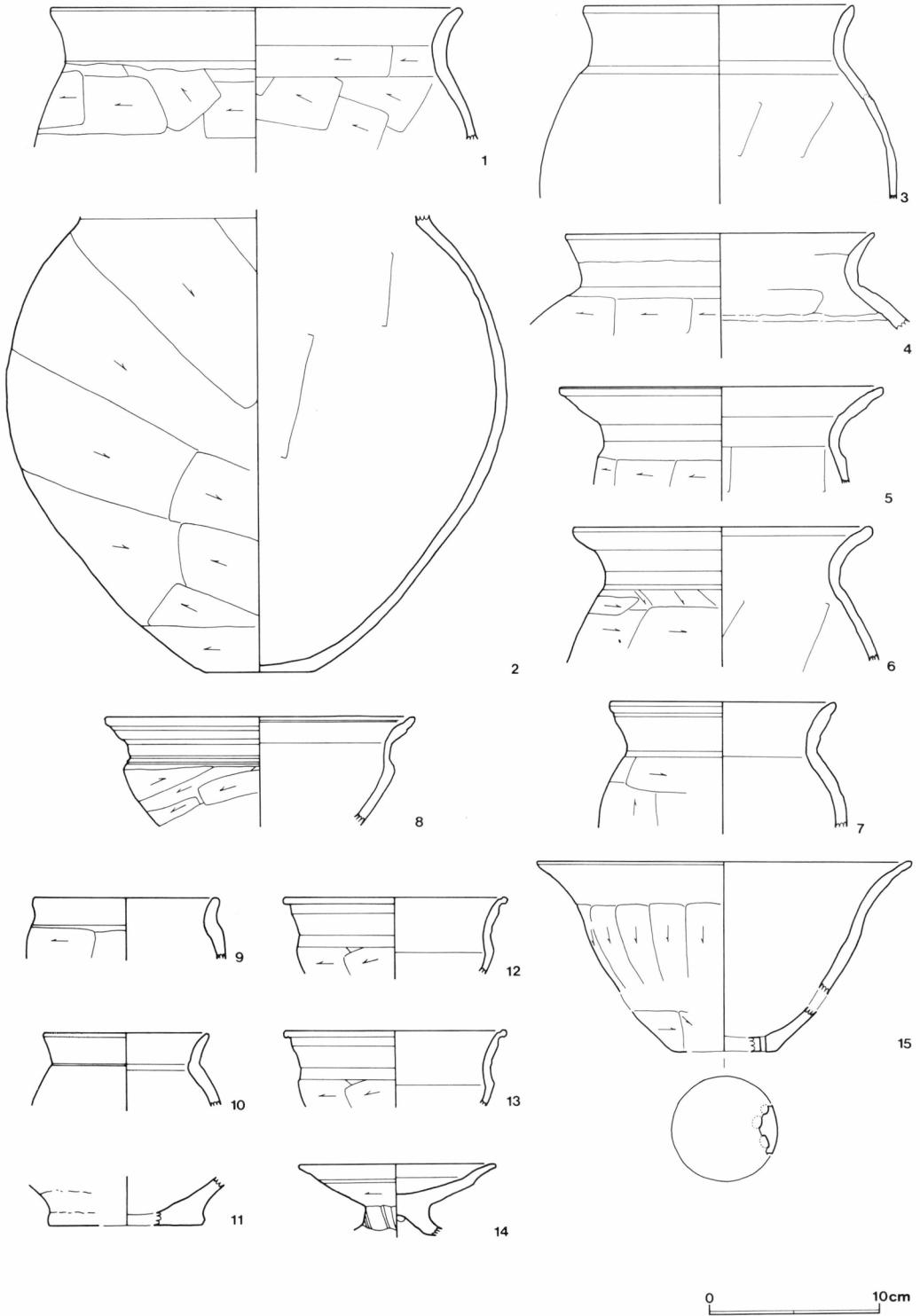
#### 9号溝（第32・35図、写真図版4）

第1次調査の溝7の延長部にあたると推定され、6号溝の東岸にそって北東にむかって流下する。溝中下層は砂礫層の堆積がみられ水流のあったことがうかがえる。遺構はハードローム層を掘り込んでいるが、溝底は砂礫層に達しておらずハードローム層で止まっている。

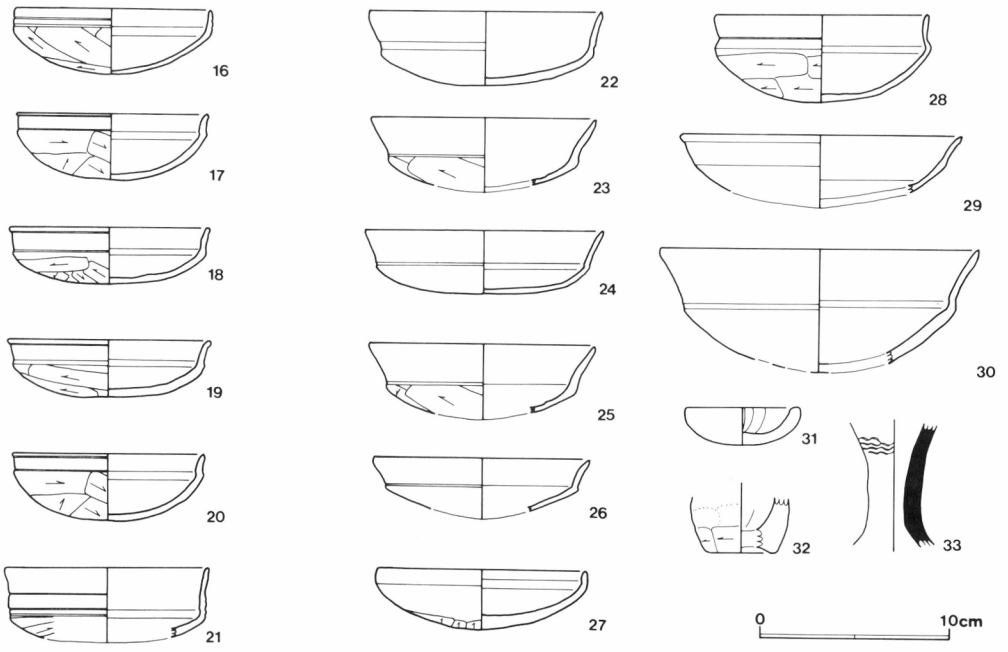
遺物は砂礫層中より僅かに土器片が出土しているが、2の土師器甕は南寄りの溝底から若干浮いて出土している。



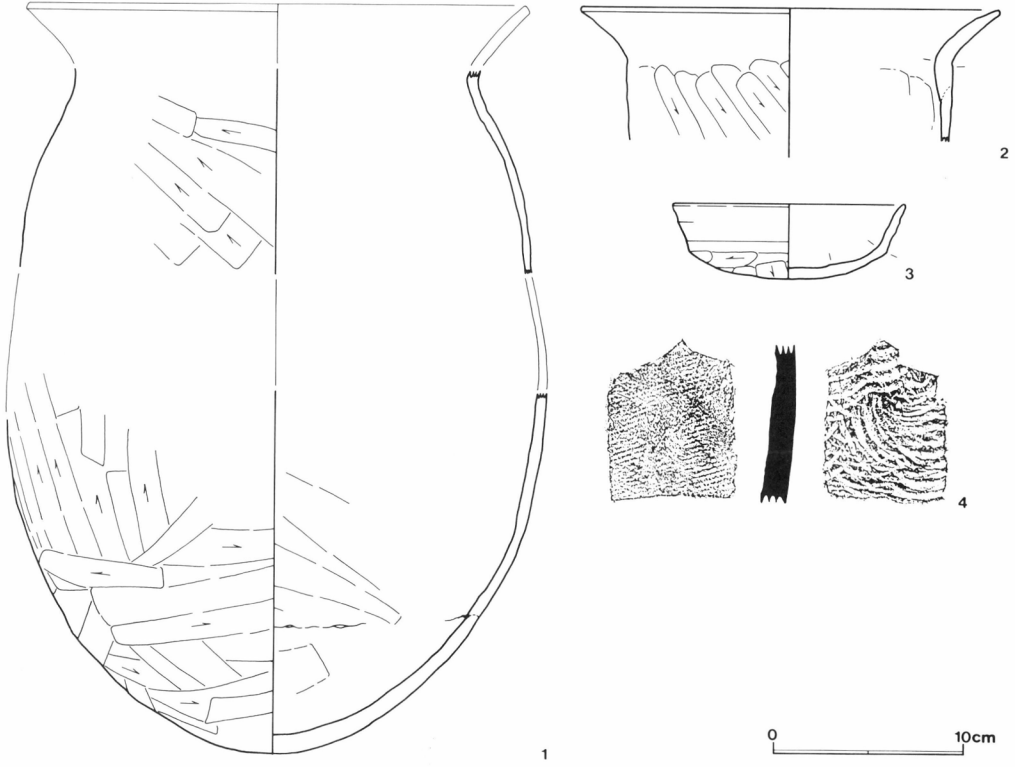
第32図 久城前遺跡 6・9・10号溝



第33図 久城前遺跡6号溝第1次調査出土遺物 (1)



第34図 久城前遺跡6号溝第1次調査出土遺物(2)



第35図 久城前遺跡6号溝・9号溝出土遺物

久城前遺跡 6・9号溝出土遺物 (第35図)

器種	番号	法量(cm)	特 徴
甕	1		胎・角閃石 石英 雲母 白色粒子 酸化鉄粒 整・外面 底部横位ヘラケズリ 胴部縦位ヘラケズリ 肩部斜位ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 形・底部はヘラケズリによる丸底 焼・やや悪 (有黒斑) 色・橙褐色 出・6号溝 残・胴部 $\frac{1}{2}$ 肩部 $\frac{1}{4}$ 備・図上復原
甕	2	口径(22.0)	胎・角閃石 石英 白色粒子 酸化鉄粒 整・外面 胴部斜位ヘラケズリ 内面 胴部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ 焼・普 色・暗橙褐色 出・9号溝 残・図示 $\frac{1}{4}$
坏	3	口径 12.1 器高 4.0	胎・角閃石 白色粒子 酸化鉄粒 整・外面 体部ヘラケズリ 内面 体部ナデ後同心円状ナデ 口縁部内外面ヨコナデ 焼・普 色・橙褐色 出・6号溝 残・ $\frac{1}{2}$
須恵器甕	4		胎・白色粒子 砂粒 緻密 整・外面 平行タタキ 内面 青海波タタキ 焼・やや悪 色・明灰白色 出・6号溝 残・胴部一部

# V ま と め

諏訪・久城前遺跡が提起する問題は多岐にわたるが、ここでは方形周溝墓と中世の遺構・遺物について若干の検討を行いまとめの責を果たしたい。真間期の溝に関しても本来ならば検討を加えるべきであるが、1988年度に行われた久城往来北遺跡の調査により新たな事実が明らかにされており、後日の課題とし今回は触れなかった。ただし、その機能について若干言及するならば、農業用排水路や集落の生活用水路としての機能ではなく、周辺で9月の大雨の時に発生する野水から集落を保護するために掘削された排水路の可能性のあることを指摘しておく。

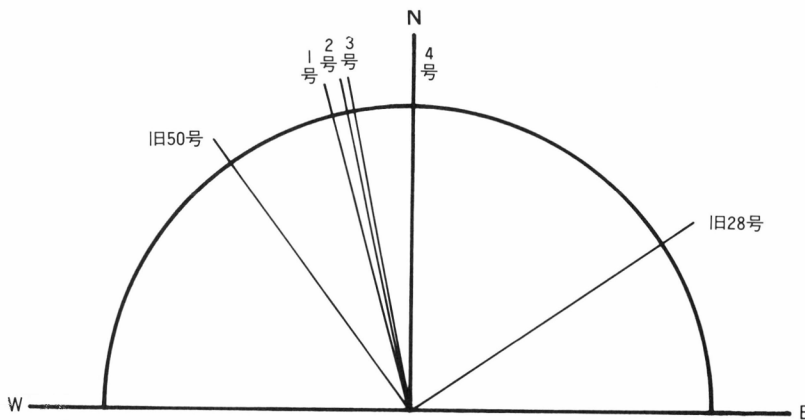
## 1 方形周溝墓について

諏訪墳墓群は現在6基の方形周溝墓が確認されている。いずれも線的な調査のため墳墓群全体の様相は明らかではないが、主軸方位や分布状況から5号溝を境に大きく2群に分割できるようである。周溝墓相互の重複関係はなく相互の企画性をもって造営されたものと推定される。本項では方形周溝墓の築造企画の復元を試みることにする。

### 1) 周溝墓間の相互企画

5号溝以西のグループでは、1号・2号・旧50号の3基がまとまって確認されておりこれらの相互企画についてみていく。各周溝墓の主軸方向は第36図に示した通りであり北から西方向に偏して主軸をもつものがほとんどで、旧28号周溝墓は例外的である。これは、旧28号周溝墓が他の周溝墓に比し極めて小型であることに起因するのかもしれない。

さて1号・2号・旧50号周溝墓の主軸線をそれぞれ延長してみると、1号周溝墓の主軸線の延長が2号周溝墓の周溝外端の南西コーナーの推定位置にあたる。また、2号周溝墓の主軸線の延長には50号



第36図 方形周溝墓主軸分布



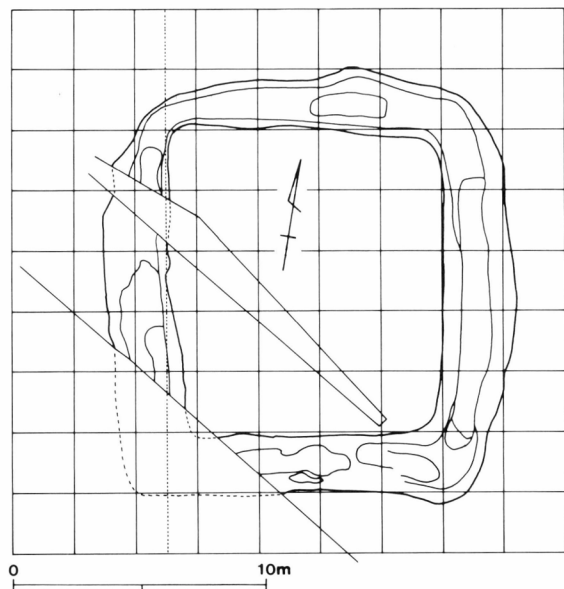
周溝墓の周溝外端の北西コーナーが位置しており、一定の企画の存在が推定される。それぞれの周溝墓の内辺からコーナーまでの距離は前者が推定で26.6m、後者が22.8mを測り、各々晋尺の1尺=24.0cmで除すると、110尺、95尺の値を得ることができる。このことから設計の尺度に晋尺が使用されたことが推定され、少なくともこのグループの設計企画に、基準となる周溝墓の主軸の延長線上にコーナーの1点を設定するというコンセプトがあったことがうかがえるのである。

それでは、それぞれの周溝墓についてはどうであろうか。周溝墓の相互企画に晋尺の1尺24.0cmが用いられた可能性があることはすでに述べたが、それぞれの周溝墓の内辺の規模を晋尺で表したものが下表である。

周 溝 墓	南 北 長	東 西 長	周 溝 幅	備 考
1 号	45 尺	50 尺		平面長方形
2 号	50 尺 ?	50 尺 ?	15 尺	
3 号	50 尺	南辺40尺 北辺45尺	10 尺	平面台形
4 号	45 尺 ?	45 尺		
旧50号	50 尺 ?	50 尺	5尺 最大15尺	

旧28号周溝墓は晋尺の1尺24.0cmで除することはできず他の尺度が使用されたものと考えられる。これは、先にも触れたが旧28号周溝墓が他の周溝墓に対し主軸方向が異なることと、規模が極めて小さいことと関連がありそうである。

さて、比較的全容の知ることができる3号周溝墓を例にあげ平面企画の復元を行ってみよう。平面図の上に晋尺10尺=2.4mの方眼を重ね合わせたものが第37図である。内辺が南北50尺、東西が北辺45尺、南辺が40尺であり西辺が直角ではなく5尺ずれて企画されている。これは3号周溝墓の南西側に別の周溝墓が存在したことに起因するのか、他の要因があるのかは推定の域をでない。周溝は10尺を基本に企画されているが、コーナー部では角をおとして丸みをもたせており、外辺の形状は不正な部分もあり必ずしも10尺とはならない。他の周溝墓においてもこのような傾向はみられ、設計企画の中心が墳丘の存在する方台部におかれた



第37図 諏訪3号周溝墓平面企画復元図

ことによるものと考えられる。周溝の用途を区画が本質的な目的としても、墳丘の土砂の採取をまかっていたのであれば、墳丘の必要土量を周溝の深さや幅を調整することによって需要を満たすことになる。したがって周溝が部分的に深くなったり、幅が広がったりするのは極めて自然なことで解することができる。

## 2 中世の遺構・遺物について

### 1) 遺構について

諏訪遺跡からは中世の溝・土坑・竪穴状遺構が確認されたが、第1次調査では土墳墓・井戸も確認されている。竪穴状遺構・井戸・ゴミ穴と推定される土坑の存在や、溝中より出土した内耳土器・摺鉢・かわらけ等の生活用品から考えて周囲に中世の生活遺跡が存在することは明白である。第1次調査の報告書においても井戸や溝の存在から屋敷地の可能性を推定しているが、今回の調査成果もその可能性を否定するものではない。井戸は16・17号溝によって囲まれた部分で検出されており、土墳墓群はその南東方向に位置する。井戸の存在から溝によって囲まれた部分が生活空間と考えればこの溝を屋敷地の区画溝と推定することができる。溝によって囲まれた部分には建物の痕跡は確認されていないが溝の外側からは竪穴状遺構が検出されており、竪穴状遺構が生活址に関連して検出される例が多いことから考えてもこの溝によって囲まれた部分を中心に建物が存在した可能性は極めて高い。また、16号溝は水流が認められたが、常時水流があったものではなく野水が流下した際に排水したものであったと思われる。尚、16号溝より出土した伏鉢状製品の存在は周辺に堂塔の存在を示唆するものであり、土墳墓群の存在と併せて興味深い資料を提供している<sup>1)</sup>。

### 2) 遺物について

上記の中世遺構からは内耳土器・摺鉢・かわらけ・石製品等が出土したが、中でも内耳土器の出土が最も多かった。ここでは内耳土器について若干の検討を行ってみたい。なお、内耳土器の名称にはいくつかの呼称が見られ、統一をみていないが本論ではその用途を考慮して内耳土器<sup>2)</sup>の名称を使用する。

#### 内耳土器の分類と分析

出土した内耳土器をプロポーシオン及び口縁部の特徴から分類してみる。

- A類 口縁部形態は不明であるが、丸みを帯びたプロポーシオンで底部付近に2条の沈線を施す
- B類 体部と口縁部の境が明瞭でなく緩やかに移行していくもの
- C類 体部と口縁部の境が明瞭で口縁部が短くやや内屈気味に立ち上がるもの
- D類 口縁部が大きく開いて立ち上がるもの
- E類 丸みをもつ体部に比し口縁部が長く内屈気味に立ち上がるもの 器壁は薄い

以上、5類に分類することができたが、型式学的特徴からほぼA類→B類→C類→D類→E類の時間的組列として捉えることが可能であり、その時間軸を想定しておきたい。可能性としてD類とE類の間にもう1類存在する可能性があるが本論では保留しておく。さてA類→B類→C類→D類→E類

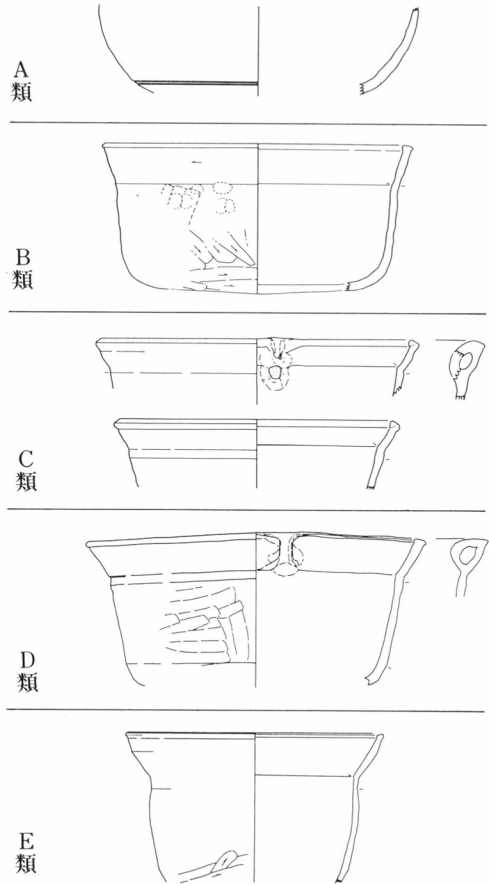
へと変化する時間的組列を想定したが、この時間軸の設定がどの程度の正当性を持ちうるか若干検討を加えることにする。

A類としたものは体部下半の破片資料であり全体のプロポーシオンや口縁部形状は不明であるが、焼成や使用痕の状況から内耳土器と判断した。このように体部下半が大きく丸味をもつ例は上野国分僧寺・尼寺中間地域等で若干の類例があるもののあまりみられない形状である。しかし、底部付近にみられる2条の沈線は、清里・陣場遺跡1号土壙出土例<sup>3)</sup>や国分僧寺SK60出土例のような体部と底部との境に段をもつものが形態化され沈線として表現されたものと思われるから、これらよりは後出するものと考えられる。さて、上記例はいずれも丸底であるがA類としたものも破片の状況から丸底になるようであり、丸底から平底へという内耳土器の変遷観の大枠を認めれば、B類としたものが平底化の傾向にあることからA類がB類より先行すると捉えることが可能である。

B類としたものは全容を知り得ることのできる資料であり、平底気味の底部にほぼ直立する体部、外反気味の口縁部をもつ。B類～D類の分類の根拠は口縁部の外反傾向と頸部の屈曲率の度合いによったが、頸部の屈曲はC類以下のものほど明瞭ではないが緩慢ではない。口縁部の長さはC類としたものの方が短く古い要素ととれなくもないが、頸部の屈曲の度合いはむしろD類的であり保守的様相のなかにも新しい要素を認めることができよう。このことは内耳土器製作工人ないしは工人集団の保守性を示すものである可能性もあるが、逆にこれらの時間差が比較的短いものであった証左となり得るものであろう。B・C類はいずれも1号土壙より出土したものであり、出土状況から一括として取り扱い得るものであるが、1号土壙がゴミ穴の可能性が高いことを考え合わせれば一括性の中に微妙な時間差(1つの内耳土器の耐用年程度の)が存在することは充分考え得るものである。以上のことからB類→C類への序列を設定しておくが、その時間差は比較的短いものであると思われる。

D類は頸部の屈曲がさらに強まり、口縁部の長さや外反度も大きくなるものである。C類の保守性を認めむしろその新しい傾向を重視するならば大きくはD類はC類に包括される可能性もあろう。しかし頸部の屈曲率やE類が伴出する事実と考え合わせC類→D類の序列を設定しておく。

E類は体部に比し口縁部が長大化し頸部の屈曲率も高く器壁も薄くなっていて、A～D類の中でも最も新しい要素を具備するものである。そのプロポーシオンの特徴からD類より後出することは明ら



第38図 内耳土器分類表

かである。しかし、D類とE類の間には型式学的なヒアタスを認めることができ、その間にもう1段階存在するのか、あるいは、内耳土器の供給地の問題に関連するものかは不明である。

以上、A類→B類→C類→D類→E類の序列のそれぞれの前後関係を検討したが、既に触れた通りその時間的スパンは比較的短かったと推定される。したがって内耳土器を出土したそれぞれの遺構に大きな時間差を認めるものではなく、各遺構の初現段階にばらつきがあってもある段階においては同時並存していたものと推定される。それぞれの実年代の推定は筆者の力量の及ぶところではないので言及を避けるがいずれも15世紀の範疇に収まるものと考えている。

### 内耳土器研究の若干の問題点

本遺跡出土の内耳土器はその量も少なくこれ以上の分析を行うには些か資料不足である。ここでは本遺跡出土の内耳土器を中心に若干の問題点を提起し今後の内耳土器研究の指針としたい。

内耳土器研究は近年盛んであるが、その編年研究の歴史はまだ浅い。1979年に中村倉司氏が「内耳土器の編年とその問題」の論文のなかで、器形によって「ほうろく」と「土鍋」とに分類したうえでI～V段階に区分し基礎的な変遷案を呈示した<sup>4)</sup>。1981年には岩淵一夫氏が『赤塚遺跡』の考察のなかで土師質土器皿と内耳土器のセット関係について検討を加えI～IV期の変遷案を呈示している<sup>5)</sup>。同年、安田龍太郎氏は「中世土師器と内耳土器」の論文のなかで土師質土器皿の法量に着目し、法量変化に時代的な斉一性があるとし、それを基に北関東の土師質土器皿の変遷観を求め、さらに内耳土器との組合わせを論じている<sup>6)</sup>。1983年には大江正行氏が『清里・陣場遺跡』の考察のなかで群馬県の内耳土器の変遷案を呈示し、釣子孔有盤形土器を内耳土器の出現の前段階と設定しそれが内耳盤形へと変化したとしている。内耳鍋形の出現にあたってはそのプロトタイプは土器のなかでは認められないとし鉄製鍋の存在を示唆、内耳鍋形の出現の背景に鋳物師組織の変革や崩壊があったとして、以後の内耳土器研究に一つの方向性を与えた<sup>7)</sup>。1986・87年には『上野国分僧寺・尼寺中間地域』の報告書が刊行されその考察中において木津博明氏によって内耳鍋の検討が行われた。その大綱は大江氏の論考をベースとした細分化であるが、その変遷を1期～5期に区分し相対年代を呈示した<sup>8)</sup>。

研究史を概観したが内耳土器の編年研究はその大綱は呈示されたもののまだ残された課題は極めて多い。内耳土器が関東において中世から近世にかけての煮沸用具の中心をしめていたであろうことは該期の生活遺跡から普遍的に極めて多く出土することや外面に炭化物が付着する例が多いことから考えてほぼ間違いのないことであるが、その使用方法に関しては不明確な部分が少なくない。2～4個存在する内耳の存在から推定してこの耳につるを通し自在鉤のようなものに吊り下げて使用したとする説が一般的であるが、橋本澄郎氏の指摘するように内耳の内側に擦れたと思われる痕跡が確認される例は極めて稀であり、果たしてつるに吊るされて使用されたかは不明である。それに対し五徳状のものの上において使用したのではないかという意見も用意されたが、終始一貫して存在する耳の機能の説明が不明瞭である。これらの折衷案として移動する時の吊り手ではないかとの案も出され、解釈のわかれるところである。先に橋本澄郎氏の指摘を引用しつるに吊るされて使用されたかは不明であると安易に肯定したが、果たして実験考古学的にどの程度の回数つるに吊るすことによって耳が擦れるものか—換言すれば果たして擦れるものか—も証明されていないし、擦れたにしても内耳土器の耐用年数と耳が擦れるに至る年数との関連も証明されていない。また、逆の立場にたてばあのような耳で

果たして内容物を入れた内耳土器を吊るし得るのかも証明されていない。これらの解消として絵巻物からの復元も試みられているが明らかに内耳土器を表現したとみられる資料は現在のところ認められていないのが現状である。これらのように様々な議論がみられるのも、中世の調理形態がそれ以前の時代と比較して考古学的に確認しづらいことも一つの要因であろう。

編年論については先に研究史でも概観したようにいくつかの編年試案が提出されているが、良好な一括遺物に恵まれておらずそれらが追証されていない現状がある。特に中世関東における煮沸形態の中心である内耳土器の出現を考えるうえで、それ以前の奈良・平安期の煮沸形態の分析を充分に行う必要があろう。特に中世においては竈から再び炉への転換が図られたとされるが、その転換を契機として内耳土器の出現をみることになるのか、中世の煮沸用具の系譜をそれ以前の煮沸用具の変遷の中で捉えることができるのかは充分検討を要する課題である。たしかに、大江氏が指摘するように鉄鍋の材質転換現象として捉え得ることが可能であれば、系譜的な断絶が存在したとしても説明は可能である。しかし、鉄製品が遺存しがたいというリスクを考慮してもその出土例は稀であるし、鉄鍋の形態そのものの出現の説明としては不十分であろう。平安期の煮沸用具の系譜の中で、中世の煮沸用具である内耳土器を捉えることが出来るか否かは今後の検討にゆだねるところである。

また、内耳土器の耳部の形状で変遷を捉える試みも行われているようであるが、木津氏が上野国分僧寺・尼寺中間地域の内耳土器の耳部の成形技法を、口縁部に上下2孔に穿孔した孔にC字状の断面円形の粘土紐を挿入して行うと復元しており、同遺跡内では時期に係わらず普遍的な技法として捉えられるようである。諏訪遺跡出土の内耳土器には断面楕円形～長方形の粘土紐を直接貼り付けたものであり、このような技法を認めることはできなかった。したがって、必ずしも内耳土器の普遍的な技法とは考え難く、この技法の差異は地域差（工人ないし工人集団の差）として捉えるべきであろう。このような観点にたてば耳部の形状の差異が型式変化の結果としてではなく、技法の差異として捉えるべきであるかもしれない。したがって、普遍的な編年のメルクマールとして成り立つか否かはさらに十分な検討が必要であろう。

次に製作者集団についてであるが、内耳土器の底面に離砂痕が認められる例が比較的多いが、これは瓦における砂造り技法と同様なものと理解することができる。このことは木津氏によって「内耳鍋の工人は、平底化の段階に至っても丸底段階からの離砂を継承して使用してる点は、後述する他の鉢類が回転糸切りにより、切り離している点からすれば、技法上に大きな相違がある。このことは、内耳鍋を焼造した工人と鉢類を焼造した工人は別組織乃至別集団によることが考えられる。」と指摘されておりその技法的差異を認めた点で卓見である。工人集団についての復元はなされていないが、瓦における砂造り技法と同様なものであるとすれば、瓦工人がその生産に関与したか、その影響を強く受けたものと考えられる。中世においても日常的に瓦の需要があったとは考えられず、瓦工人が普段は日常雑器の生産を行っていて、瓦の需要があった時に瓦の生産を行った可能性は充分考えられる。今後、中世の瓦窯址から内耳土器の生産の痕跡が確認される可能性を秘めており、その検討も大きな課題であろう。

以上、思い付くままに内耳土器研究の問題点を列記したが、本論が内耳土器研究の一助にでもなればその意図は十分に果たせたものと考えている。尚、内耳土器に関しては、文献の紹介等を含め平田

重之氏に多大なる御教示を賜った。文末ではあるが記して感謝したい。

### 3 遺跡群呼称に関する提言—「集落群」の提唱—

最近「遺跡群」という言葉をよく耳にするようになったが、この「遺跡群」という用語は常日頃から気掛かりであった。例えば、極めて有機的な結びつきをもつ古墳の集合を「古墳群」、土壌の集合を「土壌群」、ピットの集合を「ピット群」などと呼称することは問題はなからう。つまり遺構の性格を示す名称—この場合は古墳であり、土壌であり、ピットであるが—を「～群」と集合の状態で表現することは誤った使い方ではないと思われる。

そこで「遺跡」とはいったい何であろうか。我々が取り扱う考古資料は「遺跡」、「遺構」、「遺物」の3つに分類することが可能である。この3つの用語を一言で説明するのは極めて難しいが、「遺跡」が過去の人間の生活・活動・行為の形跡が地球上に残された場所であるとするならば、「遺構」、「遺物」は「遺跡」を構成する2大要素である。つまり、遺跡は個別の遺構—住居、土壌、ピット、墳墓—や遺物を一切含めた集合体である。一つの遺跡名称が指すべき範囲はそれが集落址であれば一つの集落址の単位（ムラ）を指すべき筈である。しかし実際は調査組織や担当者が代われば同一の遺跡においてですら遺跡名が異なってしまうことが少なからずあるのである。

「遺跡」という用語はそれ自体が極めて幅広い集合体であり、極論すれば地球は一つの大きな遺跡と捉えることができるのである。しかし、それでは用語としてのキャパシティがあまりにも大きすぎるので、我々は一つのまとまりのある「遺構」・「遺物」のグループを一つの「遺跡」と呼称しようという条件付きで「遺跡」という用語を使用している筈である。ここまで書けば賢命な方々には理解して頂けるものと思うが、一つの集合の名称である「遺跡」の用語に「群」という集合を表す言葉を付けて「遺跡群」と呼称するのは国語的にみてもどうも誤りのようである。

例えば「平城京」は奈良時代の国の都の遺跡であり、伝承や『続日本紀』等の文献との比較検討により歴史的名称である「平城京」として呼称されているが、いわばこの「平城京」という名称は平城京内に関連して存在した全ての遺構の総称として使用されている。「平城京」という名称は固有名詞であり、特殊な用語のイメージを受けるが、通常の呼称表現に置き換えれば「平城京遺跡」であり、決して「平城京遺跡群」ではないのである。

結論的にいえば、いくつかの有機的に関連のある集落址のまとまりを「○○遺跡群」と呼称するのであれば、その遺跡の性格を表す名称を使用して「○○集落群」と呼称するほうが正しいのではないだろうか。ここで、有機的な関連のある集落址のまとまりを表現する用語として「遺跡群」の言葉を廃し、「集落群」を使用することを提案する。

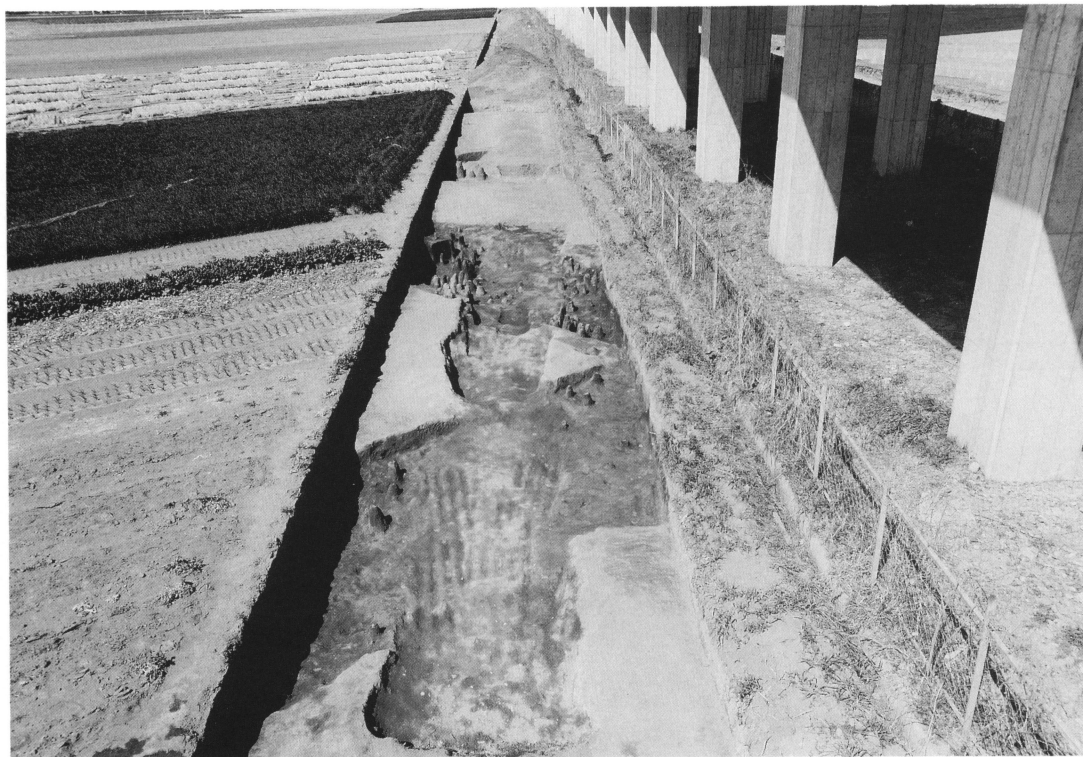
筆者自身も含め反省しなければならないことであるが、どうも考古学研究者は意外に学術用語に関してルーズなようである。「遺跡群」に限らず首を傾げるような用語がよく眼につくが、命名や学術用語の使用にあたってはもう少し十分な検討を加えたほうがよさそうである。

註)

- 1 社具路遺跡では土壇墓中の集石より露盤が出土している。復原すると八角堂に使用されていたものと推定されるが本例と併せ興味深い資料である。長谷川勇他 「社具路遺跡発掘調査報告書」『本庄市埋蔵文化財調査報告第5集 3分冊』 本庄市教育委員会 1987
- 2 ここでいう内耳土器は内耳鍋形を指し内耳盤形は含まない。本来的には両者を含めた用語として内耳土器と呼称すべきであろう。
- 3 大江正行他 「清里・陣場遺跡」『昭和53年度県営畑地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』 (助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 4 中村倉司 「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古 創刊号』 1979
- 5 岩淵一夫 『赤塚遺跡』 1981
- 6 安田龍太郎 「中世土師器と内耳土器」『野州史学 第5号』 1981
- 7 前掲註3
- 8 木津博明他 「上野国分僧寺・尼寺中間地域」『関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第12・20集』 (助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986・1987
- 9 橋本澄郎 「石那田館跡」『栃木県埋蔵文化財報告書第17集』 栃木県教育委員会 1975

# 写 真 图 版





諏訪 2号周溝墓（南より）



諏訪 3号周溝墓（南より）

写真図版 2



諏訪 3号周溝墓土器出土状況（北より）



諏訪 4号周溝墓（西より）



諏訪17号溝（南より）



諏訪1号竪穴状遺構（東より）

写真図版 4



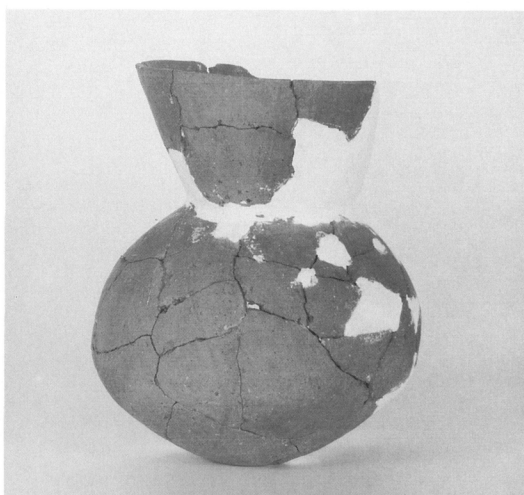
諏訪1号土坑（南より）



久城前6・9・10号溝（西より）



諏訪 1 号周溝墓 (第 5 図-1)



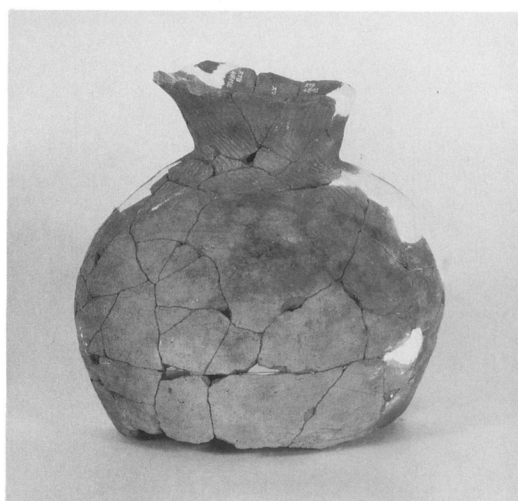
諏訪 3 号周溝墓 (第 15 図-1)



諏訪 3 号周溝墓 (第 15 図-2)



諏訪 4 号周溝墓 (第 17 図-1)



諏訪 4 号周溝墓 (第 17 図-4)



諏訪 4 号周溝墓 (第 18 図-15・18・19・20)

写真図版 6



諏訪16号溝 (第26図-2)



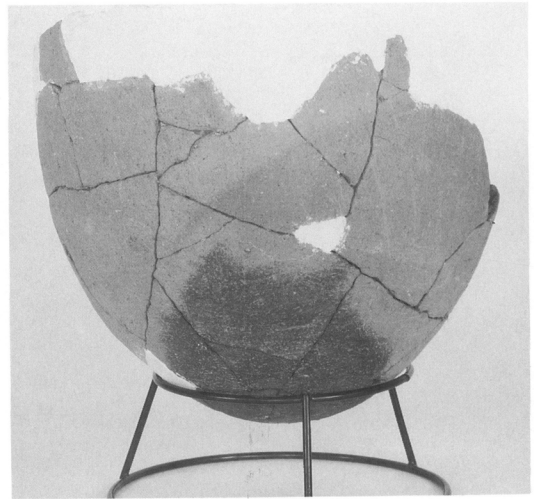
諏訪17号溝・1号土坑  
(第28図-2・5・第31図-4)



諏訪16号溝・17号溝 (第26図-4・第28図-4)



諏訪3号溝 (第22図-15)



久城前6号溝 (第35図-1)

諏訪・久城前遺跡発掘調査報告書

---

---

平成元年 3 月 20 日 印刷

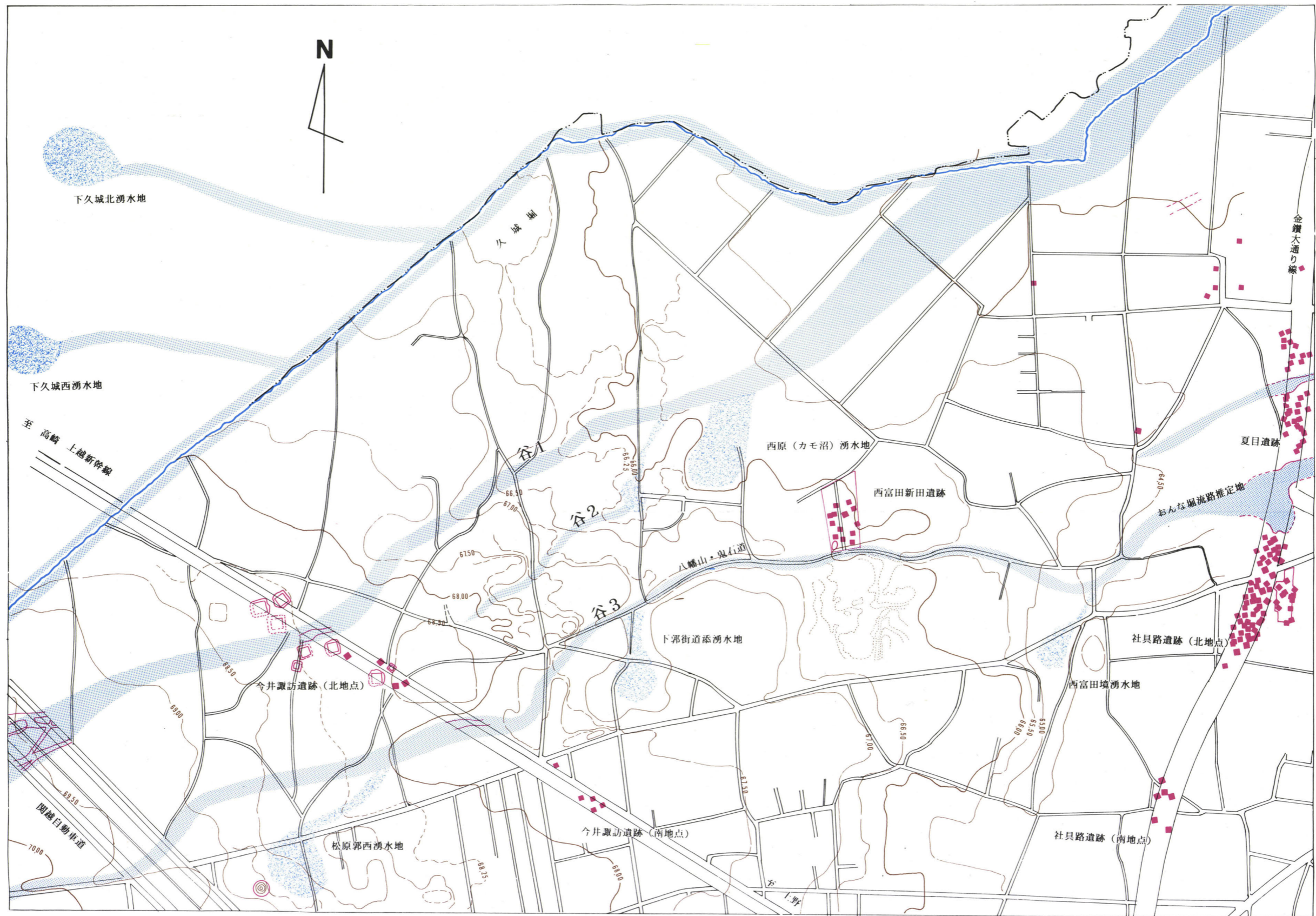
平成元年 3 月 25 日 発行

発行 本庄市教育委員会  
埼玉県本庄市銀座1-1-1

印刷 朝日印刷工業株式会社  
群馬県前橋市元総社町67

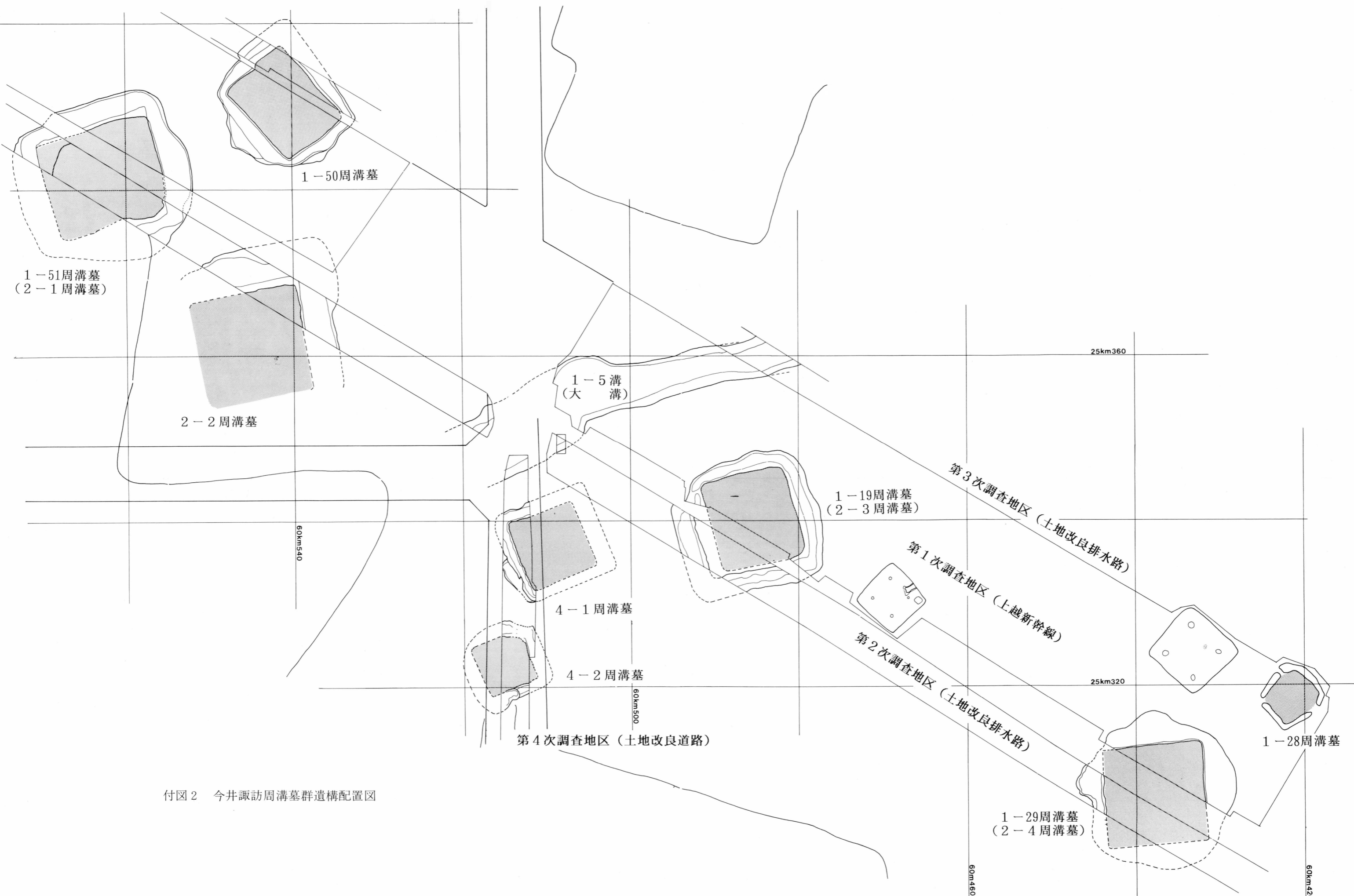
---

---



付図1 本庄市大字今井・西富田北部周辺詳細地形図





付図2 今井諏訪周溝墓群遺構配置図